

それからふたりは一言も話さなくなった。葬儀場に着いた時には既に麻子の遺体は棺に納められていて、齋場の一番小さな部屋に安置されていた。愛子は麻子の微笑んでいるような顔を見ると、涙がこみ上げてきて、黙って賢の胸に顔を埋めた。賢は優しく愛子を抱き締めた。愛子の悲しみが押し寄せる波のように伝わってきて、賢の胸を突き破り、涙となって迸り出た。愛子が賢の胸から顔を上げると、まるでタイミングを見たように係員が出て来て賢にいろいろ質問した。先ず宗派を聞かれた時、賢は愛子に確認もせずに「日本神道です」と応えた。係員は淡々と、質問を続けた。埋葬場所を聞かれた時は、「遺骨は自分たちが持ち帰ります」と応えた。係員は「火葬でいいか」と聞いた。賢は頷いた。係員の判断で、今日通夜を行い、明日の午前10時に火葬という段取りとなった。通夜も葬儀もこの辺りの方式で行うこととなった。香典返しは茶にすることとした。愛子は学校に連絡した。賢は愛子に聞いて、麻子の親戚に連絡を入れた。両親は既に亡くなっていた。麻子が幼少の頃、両親は母親の実家に住んでいたが、今は長男の家族がそこに住んでいた。麻子は長女で、姉弟はその長男だけだった。父親の実家は長崎だった。連絡を入れると「葬儀には出席できない」と、剣もほろろに言われた。父親の実家にも連絡を入れた。しかし、電話口に出た女性は麻子の名前を聞くといきなり電話を切った。一通りの連絡を済ますと、賢は愛子の手を取って再び麻子の棺の前に戻った。

「愛子、このお母さんの身体は、もうお母さんじゃないんだよ。お母さんはこの体から出て今は別空間に居るんだ。まだ次に生きる場所には行ってなくて、その途中段階にいるんだ。今日は、お母さんと3人で過ごそう。この身体のことじゃないよ。意識のことだ」

愛子は黙って頷いた。賢は愛子に「お腹が空かないか」と訪ねた。愛子は「病院で朝食をいただいた」と応えた。しかし、賢は愛子を連れて外に出た。時々愛子は思い出したように目を潤ませている。ふたりは近くにある寿司屋に寄った。その寿司屋はどうかや齋場と提携しているようだった。賢が上寿司を2人前注文すると、愛子は涙を浮かべた。その涙を見て店主が言った。

「どなたかご不幸ですか？」

「ええ、この子の母親が亡くなりました」

「それは大変でしたね。お悔やみ申し上げます。こちらの齋場でご葬儀ですか？」

「ええ」

店主はそれ以上話し掛けてこなかった。直ぐに寿司が運ばれてきた。

「愛子、お前の好物だよ。食べなさい。元気を出さなくちゃ。今晚一晩お母さんと過ごすんだよ。もう、暫くは会えなくなる。多分、僕たちが死ぬまではね」

賢は先ほどから、麻子の視線を意識していた。賢達ふたりに暖かい視線を投げ掛けてきていた。賢がカウンターの上方を見ると、そこに麻子が微笑み掛けて浮かんでいた。

「愛子、ほら、お母さんがそこにいるよ」

店主の顔面から血が引いた。

「お客さん、脅かさないでくださいよ」

「あっ！本当だ、おかあさん！笑っているわ」

店の照明が、点滅した。店主はそそくさと奥に引っ込んでしまった。賢は心で話し掛けた。

「麻子、僕と愛子は今寿司屋さんに居る。今晚、一緒に過ごそう。君が向こうの世界に行ってしまう前に、一晩一緒に居よう」

麻子の声が心の奥に響いてきた。

「あなたにも、この感覚を教えてあげたい。とても軽いのよ。今まで、自分だと思っていた、身体や思いが自分のものではなかったことが分かったわ。あなたと愛子に意識が向くと、自分の全体が暖かく膨れてくるような感覚がするの。この感覚はそちらの世界に居た時と同じ感覚ね」

「まだ、君は死後に行く世界には至っていないんだ。もう少しすると、自分の意識の状態に合った世界に移ることになるよ。君の心はきれいだから、きっと美しい世界に住むことになるよ。そこに行く前に、暫くはこちらの世界から移行するための準備をすることになっていると思う。詳しくは今夜話すよ」

愛子が意識で話に加わってきた。

「おかあさん、怪我した頭はもう大丈夫？痛くないの？」

「初めは痛かったわ。でも、もしかしたら痛くないんじゃないかと思ったの。そしたら痛くなくなったわ。だって、以前の怪我をした身体は無いんだもの。今の身体はコピーみたいなものね。変な感覚！あなた、しっかりしなくては駄目よ。これからはおとうさんとふたりで力を合わせて生きてゆくよ。わたしが天国で応援しているから。いいわね！おとうさんにわたしの分まで可愛がってもらおうよ」

「おかあさん、分かったわ」

奥で大きな咳払いの音がした。それと同時に麻子の姿は消えた。ふたりは意識を寿司屋に戻して、目の前の寿司を黙々と食べ始めた。

「お客さん、き、来たんですか？」

「ええ、今までそこにいました。そのカウンターの所に」

「うっ、嘘でしょう！わっしにゃ見えませんでしたぜ」

「嘘ですよ。心配しないでください」

「脅かしっこなしですぜ」

ふたりは顔を見合わせて吹き出してしまった。賢は愛子が笑ったので内心ホッとした。

「賢パパ、亡くなった人がいつも心の中に生きているって本当のことなのね」

「そうだよ、愛子。姿は無くなっても、生命は永遠に生き続けるんだよ。愛子、お前も失踪したとき経験しているんだ。その経験を覚えてないけどね。それは完全に意識的に生きていないからなんだよ。意識を生起させて生きると、自分がどこにいても、どんな形になっても、自己の認識ができるんだ。お前はこれから、いつも僕と一緒に居ることになるから、いろいろ教えてあげるよ」

「うん」

愛子は黙々と寿司を食べた。マグロの中トロを口に入れた時、麻子が口に入れたときの喜びに満ちた顔を思い出した。涙が愛子の頬を伝わって流れた。賢は箸で自分のイクラとウニを摘むと愛子の寿司桶に入れた。

愛子は涙顔を賢に向けて、自分のアナゴとエビを賢の寿司桶に入れ返した。賢は愛子を見て微笑んだ。愛子は眼鏡が涙で曇った顔に微笑を浮かべた。

「わたし、アナゴはあまり好きじゃないの。だって、怖い顔をしているでしょう」

「確かに、あれはあまり可愛くないな。口を開けていると、噛み付かれそうな気がする」

「お客さん、そんなことを言うと、アナゴに怨まれますよ」

横で話を聞いていた店主が言った。ふたりは店主に向かって、にっこり笑顔を作った。

漸く愛子が元気を取り戻してきた。

ふたりが葬儀場に戻ると、入り口には既に受付の台が置かれていた。その上には会葬者の記帳用冊子が置かれていて、受付のテーブルの下には香典返しの茶の袋が段ボール箱に1箱用意されている。一般的なやり方を頼んだ為、定型のパターンで準備したのだと賢は思った。夕方5時半を過ぎると、中学生や、学校の先生達がやって来た。手に手に香典袋を持っている。賢は一人一人に札を言い、記帳を頼み、香典返しを返礼に渡していった。通夜には愛子の学校の関係者と、以前住んでいた近所の人たちが訪れたが、親類は誰一人来なかった。通夜式は斎場が依頼したと思われる神主と司会者の案内で行われた。仏式で普通に行われる読経に代わって祝詞が謡われた。参列者は係りの者に渡された玉ぐしを霊前に手向けた。愛子の同級生には親しい友人はいないようで、通夜式が終わると、一言二言声を掛けて引き上げて行った。愛子の失踪前に通っていた学校には連絡を入れなかった為、参列者は無かった。参列者は全員で30名ほどだった為、とてもひっそりとした通夜式だった。通夜式が終わると、ふたりは控え室に移った。斎場の係りの者が棺を控え室の奥の祭壇に移した。ふたりはそこで一晚過ごすことになった。部屋には布団が2セット用意された。賢はテーブルに用意されている茶道具で茶を入れた。

「親戚の人は来なかったね」

「誰も来ないなんて、おかあさんが可哀そう」

「お母さんは、そんなに悲しそうじゃなかっただろう。おまえと僕がいればお母さんはそれだけで十分幸せなんだよ。それに、親戚の人、明日来るかもしれないし」

「おかあさん、お寿司屋さんで消えてしまってどこへ行っちゃったのかしら」

「一緒にお母さんを思って、瞑想してみよう。お母さんのほうに行ってはだめだよ。お母さんと呼ぶつもりになるんだ。きっとここに居るよ」ふたりは麻子をイメージして半眼で瞑想状態に入り、麻子呼んだ。麻子は直ぐにふたりの意識の中にイメージとして浮かび、程なく眼前に姿を現した。ふたりは目を開いた。そこに麻子が居た。部屋の奥には確かに麻子の棺が安置されているはずだ。しかし、そこに現われたのは、紛れも無く麻子だった。

「おかあさん！ お母さんなのね。わたしたちが分る？」

「愛子、いやね。分かるに決まっているじゃないの」

「おかあさん、お化けになっちゃったの？」

「分からないわ。だけど、愛子、最愛のあなたとわたしの永遠の恋人賢さんがここにいるのは確かね」

「愛子、お母さんはビジョンだよ。僕たちの意識がお母さんの意識をビジョン化して目の前に現しているんだ。人間は死んでも光体が残るんだ。ブラデミール・ポプキンという人が、DNAで証明したよ。一旦DNAがそこに存在すれば、それを取り除いてもそこに光子が残る。キルリアンという人も、キルリアン写真という特殊撮影で、葉っぱの映像を写真に撮ってから、その葉っぱを半分に切って、もう一度写真に撮ってみると、そこに切り取られたはずの葉の形が映し出されることを証明したんだよ。エネルギーとして映し出されるんだ。見てごらん、お母さんには手も、足もある。生きていたときと同じ姿だよ。だから、本当のお母ふんとお互いの意識を通じて話をするができるんだ。だけど僕も、お前も今は現実から少しずれているはずだ。ほかの人が見ると、麻子は見えなくて、僕たちも見えにくくなっているかもしれない。今は3人きり

だから、ゆっくり話ができるよ。今晚だけだ。あまりお母さんを引き止めると、お母さんの為にならない」

「賢パパ、分かったわ。わたし、お母さんの思いをみんな受け取るわ」
「いまの僕たちは、いつものように言葉で会話しているように感じているけど、実は意識で会話しているんだよ。現実の言葉を使うと、この3次元世界では固定化が起きるんだ。それは今の3人には危険だ。意識で話しても、現実の会話と変わらないだろう」

「うん、普通と何にも変わらないわ」
麻子は口数が少なかった。始終にこやかにふたりを見つめていた。静かに賢に話し掛けた。

「わたしはこれからどうなるのかしら」
「そのうち光のトンネルを潜って、霊の世界に入ってゆく。今までの世界より一層、真実の世界に近付くんだ。物質的なしらがみが無くなっているからね。だから、生きていた時にしがみついていた物質的なものへの執着心は全て意識から排除することだよ。一度その執着の度合いを再確認するフェーズが訪れて、その後、君がいつも感じている通りの世界が顕れるよ。その世界に住むことになるんだ。それもある程度の期間だけだね。僕もいずれ、君のところに行くと思うよ。そしたらまた会える」
「こうして、お母さんは死んでも生きているところを見ると、人間の身体って、一体何なのでしょうね。とっても複雑で精巧に出来ていて、いろいろな機能が働いているから、わたしは生きてると教わってきたわ。死んだら何もなくなるって。でも、こうしてお母さんと話ができる。賢パパ、教えて」

「あなた、わたしにも教えてください。わたしたちは一体何なのか」
「僕だって、総てが分かる訳じゃない。だけど、僕の考えていることを少し説明するよ。ふたりともいいかい、まず、絶対的な真実は、この3次元世界に人間として生きたということが、永遠の生命を持っているということの証だと思う。一旦身体や心は横に置いておいて、存在というか、魂というか、そういう点で見れば僕たちは確実に生きている。そしてその生命は虫や動物が生まれ、死んでゆくような身体と意識とを一体

で感じる、いわゆる存在と非存在というようなものではない。もっとも人間が他の生物と異なっていると言えるのは、自分の意識を生起させていればの話だけだね。少なくとも麻子も愛子も意識を働かせて生きている。だから、自分が生きていることが分かる。そして、永遠に死なないことも意識で分かる。麻子は、今まで存在として顕れていた肉体は借り物で、自分が実際の自分自身ではなかったことが分っただろう。ほとんどの人は意識を働かせずに肉体と同化して生きているから、死んだ時は、そこで自分の命が終わったとを感じる。一旦全てが消え去り、無意識の状態になる。そして、死後の世界に入って行ったとき、再び意識が目覚め、初めて意識だけで生き始めて、本当はまだ死んでいないということが分かる。だけど、意識の中に生前の感覚が焼き付いてしまっていると、それがそのまま尾を引いて、訳の分からないまま、流れの中で翻弄される。それが三途の川であり、天国であり、地獄だ。そういうものは存在しないんだけど、新たに自分の移り住む世界があまりに自分の意識の状態を反映するから、本人はそれを普通の世界と感じるんだ。ところが、それを他の人から見ると、亡くなった人の存在している世界が地獄や天国だと感じてしまう。実際は他の人も、自分の意識でその人のことを見ているから、実体を見ているのではない。ここまでは普通、誰でも知っている話だけど、ここからが重要なことだ。人は自分自身が宇宙そのものだと気づき、それに基づいた生き方をするまで、繰り返し生まれ変わる。本当はそれぞれ別々に生きている存在も全て一体のものなんだ。狭い意味では魂が元は男も女もなく一つの球形をした存在だったんだけど、それが男と女に分離して、更にそこから今のような分散した世界が出来てきたということになる。その男と女の一体の球形の存在も元々宇宙そのものの根源的な存在から転写されたもので、宇宙そのものを反映しているんだ。その中で個としての存在となった我々の魂も、更に虚と実の世界に映し出されて、そこに存在としての認識が可能な個体を得る。それが肉体であり、生前や死後の自分の姿になる。だけど、麻子は気付いたかも知れないが、そのどちらの世界に居る自分の身体も自分自身ではなくて、自分の意識が形を与えているものだという事だ。つまり意識が

真実の存在を映し出した写像だ。麻子の居る世界を認識しているのはそこに居ると感じている自分の身体の機関ではなくて、本来の自分自身だということだ。その自分自身も宇宙の根源の魂の写像だということに気付き、それを認識できると、もう、ある一つの写像の形態で生まれ変わって、その写像を通して自分の意識が生み出した世界を再認識する必要が無くなる。そうなったら、今度はまた、別の形態の写像を得て、全く別の世界を経験する。そのような形になっているのが宇宙の根源の魂だと思う。そして、その経験はこの上なく素晴らしく、美しく、歓喜を与えるものだ。これは永遠に続く。全て自分の意識が創り出している世界なんだ。自分は宇宙の根源の魂の写像なんだ。だから、何も恐れることはない。肉体の死なんて、確かに恐ろしいと感じるけど、一つのプロセスに過ぎない。今言っている写像というのは、我々が知っているCOPYとは違う。生命の形態と、意識の形態を含めての投影だ。一寸想像できないかも知れないけど……いや、ふたりとも理解しているよね。世界は目に見える部分からだけ成り立っている訳ではない。人間が、3次元世界で目にしているのは可視光線の反射光を媒体として、網膜に映し出された光の影だ。脳が解釈できる形に翻訳して、認識している。音もそうだ。耳の鼓膜を振動させた振動の周波数とその大きさから、脳が音として認識する。味覚も臭覚も触覚も全てその通りだ。特に触覚はものに触れたと感ずることができるように、肉体が構成されていて、この空間で凝縮し、固形化している物質をその硬さとして認識できるようになっている。これらの感覚を通してあらゆるものを、自然に認識できているんだ。例えば、空気は見えない。水は流体として感じられる。エーテルの動きは風として感じられる。石や鉄は固く冷たい。見えるものと見えないものはその希薄度によって区別されている。粒子と波動の特性を組み合わせたうまい仕組みだ。このような非常に精巧で美しい世界に映されている他人や自分自身を嫌悪したり、否定して存在を消し去ろうとする行為は、自分の認識によって作り上げているこの世界全体を否定する行為に他ならず、削岩機の先端が、どんどん地中に食い込んでゆくように周りを破壊しながら煉獄の渦の中に落ちてゆくことになるんだ。

意識としてね。だから、恨みに基づく殺人はもとより、自分を殺す自殺がどれほど誤ったことか分かるだろう。麻子の様に愛の心だけが全てになっているとその周りに展開する芳香を放つ世界は、切ないほど美しい世界になってくる。みんな、麻子が作ってゆく世界だ。今の麻子には僕や愛子が見ているよりずっと美しい世界が感じられているはずだ」

「賢パパの話は難し過ぎて分からない。だけど、これから少しずつ教えてくれるよね」

「わたしは、言葉の意味は分からないけど、生とは喜びなのだと感じるわ。自分が自分を見つめているように感じるの。死んでもこうして、あなたに感謝し、あなたがいつも近くにいてくれることに喜びを感じられる。わたしはあなたがこちらにいらっしゃるのを楽しみにして、生きてゆくわ」

「僕にはまだやらなければならないことがいっぱいある様に思う。全て終わったらまた会おう」

「ふたりとも、とても疲れているでしょう。休んでちょうだい。あなた達と話をしていると、生きていた時の思い出が段々リアルに現れてきて、辛くなるから。今はとっても幸せな感情で満たされているの、この状態のまま旅立ちたいのよ」

賢と愛子は頷いた。麻子の方がずっと執着心を離れていることに気付いた。自分たちが麻子への執着心を麻子の為と思っていたことに恥ずかしさを感じ始めた。ふたりは麻子から意識を遠ざけて、齋場の係が用意してくれた布団を並べて敷いた。時刻は午前0時を回ったところだった。部屋には暖房が通っていたが、温度は低めに設定されていた。ふたりは夜着を持参するのを思い付かなかった。衣類を脱いで下着一枚になると、寒さを感じて、それぞれの毛布に潜り込んだ。少しして、愛子が賢の布団の中に潜り込んで来た。賢は愛子の身体を抱き寄せた。愛子は上長袖のシャツを着ていたが、下半身はパンツ一枚で素足だった。身体が冷たかった。愛子は賢の腕の中に小さく蹲（うずくま）った。賢が言った。

「愛子、これからずっと一緒にいるから、心配しなくていいよ」

愛子の涙が賢の胸の上を伝わって流れ落ちた。

翌朝愛子は自分が賢の身体に触れているのに気付いた。急に恥ずかしさが込み上げてきて、直ぐに賢の毛布を抜け出した。自分の毛布に潜り込んで、そしてまた眠りに落ちた。賢が目を覚ましたとき、愛子は自分の布団の中に居た。賢は起き上がって直ぐに身繕いを糺すと、洗面所に行き顔をリフレッシュした。意識が冴え渡った。賢は麻子の棺を覗き込んだ。そこには既に麻子から切り離された生命を失った肉体が横たわっている。しかし、やはり麻子の生きていた時の姿は自分の意志では切り離せないことを感じた。服を着て、顔を洗った愛子が賢の横に来て麻子の遺体の顔を見つめた。愛子もそれが麻子ではなくなった存在であることを意識したが、見つめていると涙が込み上げてきた。葬儀はひっそりとしていた。麻子の兄とその妻が出席しただけだった。しかし愛子も賢も少しも寂しさを感じなかった。火葬場で茶毘に付されたときも、ふたりには悲しみが無かった。麻子の兄夫婦は火葬が終わると、そのまま帰って行った。賢は骨壺を愛子に抱かせてタクシーでアパートに戻った。部屋は既にきれいに清掃されていた。一昨日ここの洗面台の前で麻子が殺された悲劇など、何も起こらなかつたかのような感触を覚えた。ふたりは段ボール箱のテーブルを少し引き出し、その上に遺骨を祀り、暫く瞑想した。愛子が言った。

「賢パパ、わたし、まだ一人じゃ眠れない。今夜もわたしと一緒に寝てね」

「うん。愛子お前の悲しみと、苦しみが和らぐまで、お前が望む限りね」
葬儀の日の夕食は愛子が作った。賢は愛子が母親を失った悲しみと、殺人の現場を見た衝撃で疲れ切っているだろうと気遣ったが、どうしても自分で作って、賢に食べさせたいのだからと言って聞かなかった。賢は愛子の思い通りにさせた。愛子は麻子のことを思い出さないように意識していた。スパゲティナポリタンとポタージュスープを作った。賢は、たとえ拙くとも、美味しいと言おうと考えていた。しかし、予想に反して、愛子の料理の腕前はなかなかのものだった。賢は愛子の料理は祐子や亜希子に決して退けを取らないと思った。食事を終え、後片付けを済ますと愛子は鞆を開いて宿題をやり始めた。賢は暫し瞑想をした。もう麻子

の姿を求めることは止め、虚空に意識を移し、自分の内側に向かった。やがて愛子が宿題を済ませて賢の横に並んで瞑想を始めた。愛子も麻子への希求を諦めて、自分の内側を見つめた。愛子は瞑想に入る前に賢のシャツの端を掴んだ。自分が消えて仕舞うことの無いようにと警戒心を抱いた為だった。暫く瞑想をしていると、ふたりの前に麻子が映像化して現れた。

「わたしはこれから旅立ちます。あなた、そして愛子、いろいろありがとう。わたしはあなた達に巡り会えて本当に幸せでした。ありがとう。わたしは永遠にあなた達を愛しています」

そう言うと麻子はすっと消えた。ふたりの目に涙が浮かんだ。再び寂しさが込み上げてきた。愛子は声を出して賢の胸に泣き崩れた。賢は愛子を抱き留めて、麻子に感謝の言葉を贈り、そして麻子の冥福を祈った。愛子は暫く泣き止まなかった。賢は何も言わずに、すすり泣く愛子の頭を自分の胸に抱き締めていた。やがて愛子は泣き止んで、自分で賢の胸から離れた。ふたりは暫くの間、静かに向き合って座っていた。

「賢パパ、これからどうしよう」

「愛子、お前はもう少しで2年生を終えるだろう、本当は、ここで2年生を修了してから東京の中学に転校したほうが、おまえの為にはいいんだけど、僕は4月から、東京で重大なプロジェクトに参加しなくてはならない。だから、もう少しで修了するところを悪いけど、3学期から東京に転校して欲しいんだ。お前を一人残してここを去る訳にはいかない」

「わたしは、その方がいいわ。賢パパが居てくれないと、どうして生きていったらいいか分からない。大丈夫、わたしね、転校先の中学校でも勉強頑張るから」

ふたりは学校や住まいのことについていろいろ話した。賢は愛子が希望を持てるように、東京の今のマンションか別の小さなアパートに、二人で住むことを前提に説明した。原のことは何とかなると思った。その晩、愛子は床の中で賢に抱き付いて寝た。それは幼児の様な行動だった。しかし、子供とはいえ、発達した手足や胸の感触が、厭が上にも賢に刺激

を与えた。その張りのある肌は心地よかった。賢は麻子を抱いているときの様な感覚を味わった。実際愛子の髪の毛の香りは麻子の香りと同じだった。愛子は賢に強く抱き付いて、腕の力を緩めなかった。賢も愛子を強く抱き締めた。

「賢パパ、どこにも行かないで。わたしをひとりぼっちにしないで」
賢は愛子が麻子であるような錯覚を起こしそうになって、自分の胸に顔を埋めている愛子の髪を軽く撫でた。ふたりは抱き合ったままいつしか眠りに落ちた。賢は愛子を抱き締めていることを一晩中意識し続けた。賢が翌朝目を覚ますと、愛子はまだ自分の腕の中で寝息を立てていた。部屋はしんと冷えて、布団の外に出ていた右手が冷たくなっている。賢は右手を布団の中に戻して、そっと愛子の肩に触れた。その動きで、愛子は目を覚ました。愛子は自分が賢の腕の中にいるのに気付いて、決まり悪そうに賢からそっと身体を離し、自分の布団に戻った。賢は自分の身体の一部が抜け落ちてしまったような感じがした。

「おはよう、眠れたか？」

「おはよう、ぐっすり眠れた。おかあさんの夢も見なかったわ」
愛子が食事の支度をした。愛子の通う中学校は既に冬休みに入っていた。ふたりは食事を済ますと直ぐに印鑑や学生証を持参して学校に出掛けた。事件の直後だった為、学校には校長と数人の教師が出勤していた。その中に愛子の担任もいた。ふたりは校長室に通され、ソファーに案内された。賢は担任と校長に、通夜に参列してくれたお礼を述べてから、今後の愛子のことについて話をした。賢は麻子が自分の内縁の妻であり、愛子を正式に自分の籍に入籍する予定だと言った。そして、愛子を東京の中学校に転校させたいとの意向を説明した。校長は背の低い、白髪交じりの頭を上の方まで刈り上げていて、定年間近な感じのする男性だった。麻子が亡くなったことに対して、愛子の心の動揺を気遣っていた。愛子にその意向を確認してから、担任の方を向いて同意を促した。担任は、40歳前後の女性だった。痩せ気味で鋭い目つきの顔をしていたが、声は軟らかく顔からくる印象とは大きく違っていた。担任は愛子が非常に優秀なので、転校してしまうのが惜しいと言った。愛子は学年トップ

の成績だと言った。担任は転校の手続きに必要な用紙を賢に渡した。ふたりはその場で転校届けを作成し、担任に返した。担任が直ぐに転校確認書を作成して校長に承認印を押してもらい、それを賢に渡した。皆、神妙な顔をしている。担任が賢に、市役所に行って転出学通知書を受け取って来るように言った。ふたりは担任と校長に礼を言ってから、転校確認書を手にして直ぐに市役所に向かった。市役所では先ず、麻子の死亡届を提出した。それから担任から受け取った転校確認書を提出して転出学通知書を受け取った。その後で賢は愛子の転出届を提出した。賢が戸籍係の窓口にあった養子縁組申請書を一通手にして市役所を出ると、ふたりは再び記者達に取り囲まれた。

「内観さんですね。この事件とはどんな関係があるのですか？」

一人の記者が聞いてきた。賢は直ぐに応答した。

「暫く、そっとしておいてやってください。この子の心の傷が大きいことはおわかりでしょう」

記者はそんなことは関係無いとばかりに、執拗に質問してきた。

「あなたは、被害者とはどういう関係ですか？先日の青森の失踪事件からそれほど時間が経っていないでしょう。どうして、ここにいるのですか？」

「それに、鹿児島でご自身も失踪されているでしょう。この一連の事件は皆関連があるのですか？今度の殺人事件もそれに関係があるんじゃないですか？」

賢は言った。

「今は、この子の心の傷を癒すことが先決です。少し道を空けてください」

賢は愛子の手を引き、記者を押し分けるようにして先に進んだ。ふたりは急いで学校に戻った。学校には既に別の記者達が来ていて、また質問攻めに遭った。ふたりは校長室に入り、校長に転出学通知書を提出した。校長は直ぐに担任に連絡した。担任は愛子の通知票を持ってやって来た。通知票には体育を除いて全て5の数字が記入されていて、担任からのコメント欄には、「2学期終了時に転出。非常に優秀な生徒で、学年でも

トップレベルです。性格は温厚で、特に人に対する思いやりの心は、僅かな在学期間にも拘わらず、クラス全体、学年全体にまで影響を与えています」と記入されていた。賢はそれを見て嬉しかった。愛子が親ばかりでなく、誰に対しても優しいという特質を持った娘なんだと思った。担任は通知票と一緒に用意した2通の書類を校長に提出した。校長は一通り目を通すと、2通の書類に印を押して担任に戻した。担任はそれを受け取ると、神妙な顔になって

「愛子さん、お母さんを亡くして辛いでしょうが、クラスのみんなが応援しているから、頑張ってね」

と言いながら、通知票と2通の書類を愛子に渡した。それは在学証明書と教科書受給証明書だった。賢は校長の方に一步踏み出して言った。

「先ほども申し上げましたが、わたくしはこの子の養親になりたいと思っています。この子はまだ15歳になっていませんので、ここに成人二人の証人が必要なようです。愛子は親戚縁者からも遠ざかっておりますので、誠に申し訳ありませんが、校長先生と、ご担任の先生に、愛子の養子縁組の証人になっていただけないでしょうか？」

校長は賢の顔を暫く凝視していたが、担任に向かって言った。

「杉田先生、愛子さんの為に、わたしと一緒に証人になることをお願い出来ますか？」

担任は快く承知した。校長と担任から署名捺印をもらうと、ふたりは深く頭を下げて礼を言い、校長室を出て門に通じる運動場に出た。幸いなことに記者達は門の外にロックアウトされていた。校長が取材の申込を拒否していたのだった。校庭を歩いていると、賢の携帯電話が鳴った。検察官からだ。中川恭一が取り調べの中で、賢への恨みの言葉を行っているとのことだった。検察官はいずれ、裁判で証人か、または参考人として出頭してもらう可能性があるかと伝えてきたのだった。門を出ると、再び10人ほどの記者に取り囲まれた。

「学校へはどのような理由でいらしたのですか？今度の事件と何か関係があるのですか？」

賢は少し振り向いたが、それには応えなかった。愛子も背中を丸めるよ

うに小さくなって、賢の後に附いて記者達を避けるようにして通り過ぎようとした。その時一人の記者が大きな黒いマイクを手にしてふたりの前に迫り、そのマイクを上に掲げた。それを見た愛子の顔面からサッと血の気が引いた。愛子の身体が小刻みに振るえ始め、その場にしゃがみ込んでしまった。記者達の喧噪が一瞬静まったので、賢はおかしいと思って愛子を振り返った。附いて来ているはずの愛子が2メートルほど離れたところに蹲っている。賢は何が起きたのかと思って、急いで愛子に掛け寄った。

「愛子、どうした。大丈夫か？」

愛子はただガタガタと身を震わせている。顔は青ざめて今にも倒れ込みそうである。賢はあの時の恐怖が蘇ったのだと思った。

「トラウマだ……済みません、少し離れていただけませんか、まだ、事件の恐怖から立ち直れていないんです。そっとしておいてください」そう言われてもその場を動かず、カメラを愛子に向けたまま佇んでいるカメラマンや記者に、賢は叱責の声を発した。

「言っていることが分からないのか？ 君たちが集中的に寄ってくることで、愛子が恐怖の記憶を蘇らせて、苦しんでいるじゃないか」

賢の怒鳴り声で、記者達は一人、二人とその場を離れていった。カメラマンはそれでも執拗に愛子や賢にカメラを向け続けながら、じりじりと後ずさりして、ふたりから3メートルほどの距離を作った。その時大きなマイクを掲げた男の姿が賢の目に入った。賢はそのマイクを振り上げた姿が中川恭一の姿として愛子の目に映じたのだと思った。賢はそのマイクを持った男に言った。

「済みませんが、あなた、そう、そのマイクを持った姿が、殺人者を想起させたようです。マイクを愛子に見えないように隠して頂けませんか」記者はマイクを下に降ろして、人垣の後方に下がった。賢が愛子に優しく話し掛けた。

「大丈夫だよ。心配ないよ。記者がマイクを持っているだけだよ。さあ、一度アパートに戻ろう」

愛子は漸く落ち着いてきた。身体の震えも止まった。賢は愛子の手を引

いて歩き始めた。記者やカメラマンはもうふたりを追跡するのを止めたようだった。誰も追って来なかった。ふたりはアパートの部屋に戻った。部屋には食料は残っていなかった。賢は先ず湯を沸かし、茶を入れた。段ボール箱のテーブルの上には麻子の遺骨が載っている。賢は骨壺に茶を供えて、祈りを捧げた。愛子も賢と一緒に両手を合わせた。3日後には新しい年を迎えることになる。賢はどうしたものかと考え込んだ。

「お腹空いただろう。何か買って来るよ」

「賢パパ、どこにも行かないで、わたしをひとりぼっちにしないで」

賢は自分が軽率だったことに気が付いた。愛子はあの恐ろしい状況から抜け出していないのだった。賢は愛子に近くのラーメン店を教えてもらい、そこに電話してラーメンを2人前出前してもらうことにした。ラーメンが届くまでに40分ほど掛かった。配達人がドアをノックした時、愛子は身を震わせて怯えるような目をして、賢の近くに寄った。賢は愛子を少しなだめて、落ち着かせてからドアを開け、配達人を中に入れた。配達人は小柄な青年だった。きびきびした動きで、ラーメンの丼を二つ上がり框の上に置いた。薄暗い部屋の中は誰もいないのではないかと思われるほどひっそりとしている。配達人は愛子の存在に気が付かなかった。料金を受け取ると、「まいど」と言って、ドアを閉めた。賢が丼を一つ持って愛子の所にゆき、段ボール箱のテーブルの上に置いた。そして自分の丼を持って来て愛子と向かい合って座った。骨壺が置いてあるので、丼を置くことはできない。賢は丼を畳の上に置いた。

「さあ、食べよう。お母さんもまだ近くにいるよ。僕たちを見ているはずだ」

「まだ旅立ってないかな」

ふたりはラーメンを啜って食べた。空腹感が、ラーメンの香りを強烈に感じさせた。愛子が、一旦持った箸を置いて突然立ち上がった。流し台の所に行くと、麻子が使っていた茶碗と箸、それにお玉を持って来た。愛子は自分の丼から麺と汁を麻子の茶碗に掬い取って、茶碗と箸を骨壺の前に置いた。

「おかあさん、一緒に食べようよ」

「・・・・・・愛子ありがとう・・・・・・そちらのものは頂けないけど、供えてくれたので、味や、香りが楽しめるわ・・・・」

姿は現さなかったが、ふたりの意識の中に麻子の言葉が響いた。ふたりは声を合わせて

「いただきます！」

と言って、ラーメンを食べ始めた。愛子は次第に元気を取り戻していった。

「愛子、直ぐにここを引き払うか？それとも正月明けにするか？お前の望む通りにするよ」

「お正月は、ここでお母さんの思い出の中で過ごしたいわ。でも、学校のこともあるし。わたし、1年遅れているでしょう。だから、3学期が始まる時には新しい学校に移ってみたいわ」

「そうだな。それじゃ、こうしたらどうかな。明日か、明後日までここに居てから、僕がお母さんと一緒に行った奈良に行く。そこに1、2泊して、それから東京に行き、住民登録をして、学校の転入届を出す。その移動の間、お母さんの遺骨とずっと一緒にいられるだろう」

「それがいいわ。お母さんと一緒に行った所に連れて行ってね」

「勿論だよ。そこで、僕とお母さんの意識は一つになったんだから。その時の意識の力でお前を呼び戻したんだからな」

「ふうん、そうだったんだ。お母さんも一緒に、3人で奈良に行きたい」

「よし、そうしよう」

翌日ふたりはアパートの荷物の整理と、大家との交渉を行った。そして、その翌日の大晦日の早朝、アパートと電話を解約し、段ボール箱5箱の荷物と、圧縮した布団のパックを運送屋に頼んで永代のマンションに送ってもらう手配をした。それから大家に立ち会って、部屋の中を確認してもらった。大家は品のよい顔立ちをした初老の男性で、物腰も柔らかかった。流し台の辺りを特に注意深く確認していたが、ほんの1ヶ月の間の契約だったので、特に目立った傷も汚れも見いだせなかった。契約書の解約の条項の最終節に、「万一借り主が、重傷、死亡等で契約を維持できなくなった場合は、この契約はその時点をもって自動的に終了す

るものとする」という記載があった為、解約はスムーズに行うことができ、預託してある敷金の半分が戻ってくるようになった。全てを終えるとふたりは幾分疲労感を感じながらアパートを出た。ふたりが立ち去る時、大家がぼつりと言った。

「この後、借り手は無いかも知れないな。・・・愛子さん、元気を出して生きてってください」

12月31日の午前11時頃ふたりはJR奈良駅に着いた。賢は愛子を連れて、一旦駅の改札口を出た。そして、先ず旅館に電話を入れた。奈良小道旅館は麻子と一緒に泊まった旅館だ。この旅館が予約できたのは奇跡に近かった。ここに来て年末を奈良で過ごすことなど無謀な考えのはずだった。しかし、賢は旅館を探すとき、駄目だという気がしなかった。最初に電話したとき、一番泊まりたかった旅館を予約できたのだ。旅館の予約係は、賢達が奈良駅にいるということを聞いて、いつ来ても問題ないと言った。ふたりはロッカーに荷物を預けると、賢は小バッグを手にし、愛子は布で出来た手提げに、賢のトラベルバッグの中に仕舞ってあったL版の麻子の写真を取り出して入れ、それを手にした。ふたりは旅館には向かわず、再び改札口を抜けると停車していた桜井線に乗り、そのまま長谷寺に向かった。愛子にとって、奈良はたった一度の宿泊旅行を体験した思い出深い場所だった。薬師寺と唐招提寺、そして東大寺と奈良公園に行ったことをはっきり覚えていた。小学校の修学旅行だ。友達と猿沢の池の畔で遊んだ時の記憶が蘇ってきた。愛子には家族旅行の思い出は無かった。賢は愛子の目頭に時々涙が浮かんでくるのを見て、その度に東京での新しい生活の話をした。愛子は新しい生活に対する不安と期待が折り重なった複雑な感情に捕らわれ、知らないうちに涙が乾くのだった。桜井駅から近鉄大阪線に乗り換え、2つ目の長谷寺駅で降りると、愛子は長谷寺まで賢と手を繋いで歩いた。長谷寺門前の店々は晦日から元旦に向けての支度で、人々が忙しそうに立ち働いている。参道の階段を一段一段ゆっくり踏み締めながら登って行った。寺も年越しの準備で多勢の人が作業をしていた。辺りに仮設照明の電線を張り巡らせている。ふたりはほとんど話をしなかった。ただ、黙々と石

段を登って行った。途中で右に折れ、暫く行って今度は左に折れて昇り続けると、左手に本堂が見えて来た。本堂の拝殿の周りには7、8人の人がいて、参拝の順番を待っている。賢が愛子の手を引いて本堂の伽藍の土間を奥に進んで行こうとすると、愛子が怖じ気づいたように立ちすくんで、賢の手を引き戻すようにした。

「賢パパ、わたし怖い」

「大丈夫だよ。僕が付いているじゃないか」

「向こうから誰か来るような気がするの。怖い人が」

確かにそこはトンネルのような印象を与えた。トンネルの奥には明るい出口が見える。愛子が怖がったのは、カメラの三脚を手にして反対側の出口を背に、こちらに向かって歩いて来る一人の男の姿だった。通路の中央右手に設けられた暗く吸い込まれてゆくような拝殿が、その男をハンマーを手にした中川恭一のような姿に浮き上がらせていた。愛子は賢の手にしがみ付いて、頭を下げてそこを通り抜けようとした。しかし、賢は11面観世音菩薩像の前で立ち止まった。右手に3脚をぶら下げた男性は、拝殿の前で賢達の横を素通りして行った。賢は、頭を自分の右の背に埋めて震えている愛子を、正面に引き寄せて抱きしめた。

「もう、怖い人はいなくなったよ。これが観世音菩薩様だ。君のお母さんが感動して涙を流した観音様だよ。あの慈しみに溢れた御姿を見てごらん」

愛子は恐る恐る顔を上げて、暗がりの中を見た。そこには驚くほど大きな観世音菩薩像が佇んでいた。愛子はいきなり燭光を浴びたかのように目が眩んだ。その瞬間、観世音菩薩に自分の頭を撫でられているような感覚を味わった。愛子は意識が次第に別空間に移ってゆくように感じた。布の手提げに手を入れると、中から1本の簪を取り出して、自分の髪に挿した。それは麻子とお揃いの簪だった。

「おかあさん、ほらわたしも似合うでしょう」

麻子がここで言った言葉が、賢の脳裏に蘇ってきた。

「わたし、一度、簪を髪に飾ってみたかったの」

賢が愛子を振り向くとそこに麻子が着物姿で佇んでいた。冬なのに薄い

灰色の大島紬を着ている。髪にあの簪を差している。よく見ると愛子もいつの間にか着物姿になっている。愛子は花柄の小袖を羽織り、麻子と同じように髪に簪を差していて、眼鏡は掛けていない。賢が話し掛けようとする、たちどころにふたりの姿が消え、眼鏡を掛けてセーターを着た愛子の姿だけがそこにあった。賢はふと、死んでからでも着物を着ることができるのかなと思った。それは確かに麻子だった。命は永遠とは分かっている、麻子がこの世界にいなくなってしまったことは、喻えようも無いほど悲しいことだった。賢は涙ぐんで、愛子を抱き寄せた。「お母さんも簪を差しているよ。愛子とお揃いの簪をね」

「・・・うん・・・おかあさん、きれいだった」

ふたりは観世音菩薩像に拝礼をして暫く瞑目してから、奥の5重の塔を見物した。それからもう一度観世音菩薩像の前に戻り、再び拝礼してから石段を降りた。

ふたりは麻子の面影を抱いて栈道を下り、電車に乗った。奈良駅に近づくに従って電車は次第に混雑してきて、駅では観光客と思われる多くの人たちに混じって、押されるようにして降りた。

「賢パパ、もう、宿に行くの？」

「何処か行きたいのか？」

「ううん、だけど、なんか時間が勿体ないような気がして」

「一旦チェックインして、それから奈良公園を歩いてみよう」

「うん、奈良公園って、東大寺のあるところでしょう」

「そうだよ。東大寺も、春日大社も、興福寺もあるよ。東大寺だけでも見て廻るのに随分時間が掛かるんだ」

「わたし、覚えているわ。大仏様の裏に穴の空いた柱があって、男の子達がみんなそこを潜って（くぐって）いたわ」

「どこに行くか、宿に向かうバスの中で相談しよう」

「うん」

駅のロッカーから荷物を取り出すと、愛子は骨壺を抱え、賢はトラベルバッグを手にして市内循環バスに乗った。ふたりは並んで座り、宿にチェックインした後、東大寺に行くことを話し合った。奈良公園の奥の大

仏殿春日大社前で降り、奈良小道旅館に着いた。この時期に、麻子と共に来たこの旅館に空き室があったことに、ふたりとも驚きを超えて、見えない存在の意志への畏怖の念を覚えた。賢は宿帳に愛子を長女と書き込んだ。愛子がホテルに泊まるのは小学校の修学旅行以来2度目のことだ。修学旅行では先生が全てお膳立てしてくれたので、ホテルではただ自分たちの部屋に入ればよかった。賢と共にチェックインの手続きをすることがとても新鮮に感じられた。賢が宿帳に記入しているとき、愛子は宿の受付の周りをきょろきょろと見廻していた。骨壺を抱きかかえている胸が高鳴った。チェックインが済んで案内された部屋は、麻子と泊まった部屋だった。賢は自分の意識がこの場面を再び作り出していることを確信した。愛子は部屋に入ると、まず麻子の骨壺を床の間にそっと安置した。そして、小走りで窓に近づき、外を覗き込んだ。暫く外を眺めてから、今度は部屋の中をあちこち歩き廻った。洗面所の奥の浴室を開けてみて、愛子は大きい声で言った。

「賢パパ、凄いわよ。こんなに大きなお風呂がお部屋毎にあるのかしら。前の家のお風呂より大きいわ」

「愛子、この旅館もこの部屋も、お母さんと一緒に来た場所だよ。こんなに素晴らしい旅館なのに、この旅館しか空いてなかった。そして、この部屋しか空いてなかった。全てこの前の通りだ」

「うん、賢パパ、きっとお母さんがわたしたちの中において、案内しているのよ」

賢は、それはあり得ないことだと思ったが、麻子の想いは否定できなかった。賢は愛子にテーブルの所に来るように促し、茶を入れて愛子と自分の前に置いた。盆の中には茶菓子が用意されていた。愛子は正座して座ると、茶菓子を食べ、茶を口に含んで微笑んだ。その時ノックの音がして、仲居が入って来た。その仲居は麻子と泊まった時に初めに挨拶に来た仲居だった。

「ようこそおいでくださいました。仲居の佐川と申します。いつもご利用頂き、ありがとうございます。お客様は既にご存じのことと思いますが、一応お部屋の説明をさせていただきます。入り口の左手が洗面所と浴室

になっております。大浴場はフロントでご説明させていただいたと思いますが……」

「はい、伺いました」

「それでは、大浴場については省かせていただきます。お部屋のお風呂は、お湯がいつでもお使い頂けるようになっています。ここがクローゼット、そしてこちらが浴衣と丹前でございます。ご主人様、浴衣のサイズは大でよろしかったですね。お嬢様は中でよろしいと思います。お食事は7時でございますね。お食事が終わりましたら、電話でフロントにご連絡くださいませ。取り急ぎ片付けさせて頂き、床を延べさせて頂きます。非常口は廊下を出て右に真っ直ぐ行った突き当たりでございます。何かご不明な点、ご要望等ございましたら、フロントまでご連絡くださいませ。今日は年の瀬ですから、いろいろな催しがございます。お寺や、神社はこの暮れからお正月に掛けて提灯や照明が灯って、大勢の人で賑わうんですよ。初詣はどちらにお出でですか？」

「今から一寸東大寺に行つて来ようと思っています。そして一旦戻つて、初詣は……愛子、春日大社はどうかな？」

愛子が応えに躊躇しているのを見て仲居が言った。

「もう4時を廻っていますから、大仏さんはご覧になれないかも知れませんが、初詣でしたら春日さんはとっても素敵ですよ。登楼に火が灯つて、素晴らしい雰囲気です。是非いらしたらよろしいかと思います」

「そうですか。じゃ、そうします。いいな、愛子？」

愛子は黙つて頷いた。

「この前は、とっても素敵な奥様とご一緒にいらっしゃいましたが」

「ええ、でもあれはつい3日前に亡くなりました」

愛子が視線を骨壺に移すと、それを覚つた仲居が言った。

「そうとも存じませず、大変な無礼を口にいたし、申し訳ありませんでした」

「いいえ、わたくしたちのことを覚えていてくださつて感謝致します。わたくしたちは和歌山から来たのですが、この旅行の後、この娘（こ）を連れて東京に移り、そこに住むつもりです。この旅行はこの娘と、亡

くなくなった母親との最後の思い出の旅行なのです」

「どうか、皆様と一緒にこちらで心ゆくまでお寛ぎ頂きたいと存じます。それではわたしは失礼致します」

仲居は目を潤ませて深々と頭を下げ、その場を立ち去った。少ししてふたりは長谷寺に行ったときと同じ出で立ちで旅館を出た。東大寺までは10分ほどだった。時刻は4時半を回っていて、既に大仏の拝観はできなかった。愛子が二月堂を見たいと言うので、賢は愛子を伴って、大仏殿を左手に見ながら二月堂まで石段を登った。大仏殿は眼下に広がる赤紫色の夕日の中にどっしりと腰を下ろしている。ここで行われる火の行の炎を空に映したかのように、西の空が染まっている。愛子はスカートのポケットからハンカチを出して目頭を押さえた。

「とってもきれい。お母さんに、この夕日を見せてあげたい」

愛子は布袋からティッシュに包んだ麻子の写真を取り出して、麻子の顔を夕日に向けた。

「お母さんも見ているよ。一緒にいるんだから」

「うん、でも……こうしたいの。ねえ、賢パパ、二月堂は3月にお水取りという行事をやるのよ」

「そうか、3月にな。寒いだろうな」

「火を焚くらしいけど、とても凄いいたいよ。江戸時代だけど、その火の粉で火事になったこともあるらしいよ」

「なぜ、そんなことするのか。本当は宗教的な意味があるのかも知れないけど、本当の目的を知っている人はほとんどいないんじゃないかな。何でもそうだよ」

「賢パパ、わたし、中学校で東大寺のこと教わったとき、市の図書館に行って二月堂のことを調べたことがあるの。3月のお水取りは十一面観世音菩薩様に関係があるみたい。昨日長谷寺で見たのも十一面観世音菩薩像だったでしょう。あのね、むかし、実忠という人が京都で修行をしていたときに洞窟を見つけて、その中を進んでゆくと不思議な光の世界に入って行ったんだって。そこで大勢の菩薩様がとてもゆっくりしたテンポで修行をしていて、菩薩様達を導いている観世音菩薩様を見たんだ

って。その光の世界で菩薩様達がしていた修行を何とかこの世界でもやりたいと思っただけなの。この世界に戻って、大阪の海岸に出たときに十一面観世音菩薩の小像が流れて来たんだって。それを祀る為に二月堂を建てて、光の世界で菩薩様達のやっていた修行を二月堂でやるようになったんだって。火事でお堂が焼け落ちた時も、十一面観世音菩薩様の小像は焼けずに残ったんだって。火と水を使うのよ。その光の世界の1日がこちらの世界の400年になるんだって、それを思い切り縮めて修行しているのがこの行事で、この行の中で懺悔をして、日本中の人の罪や汚れを清めるんだって」

愛子は言葉の最後の語尾を上げて話す。賢は愛子への愛おしさを一入強く感じた。

「愛子、詳しいね」

「わたし、修学旅行がたった一つの旅行だったから、奈良のことを次から次に調べたの。だから知っているの」

長谷寺ではあんなに無口だった愛子がよくしゃべるので、賢は嬉しくなった。

「長谷寺の十一面観世音菩薩様のことも何か知っているのか？」

「うん、少し。だけど、あの時は、何故か分からないけど、そんな記憶はみんな頭から消えてしまっていたの」

「そうか・・・愛子、お前も体験しているから少しは分かるかも知れないけど、お通夜の時にも言ったように、この世界は見える世界と見えない世界からできているんだ。その両方の世界とも、実は本当の世界じゃないんだけどね。そこで考えたり、体験したりできる劇場の様な場所なんだ。自分の意識で思う通りに演技できる世界なんだよ。本当の世界は身も心もこれ以上ないほど清められたときにしか知ることができないんだよ。少しでも何か心に心が動くようだと、本当の世界は見えなくなってしまふんだ。さっきの実忠の観た世界は多分、見えない方の世界で、修行していたのは本当の世界に向かう修行なんだと思うよ」

「賢パパ、わたしが失踪したとき、行っていた世界も見えない世界なのかな」

「そう、その入り口辺りかな」

「わたし、分からない。だけど、賢パパ、これからずっと一緒にいてくれるでしょう。いっぱい教えてね」

「勿論だ。東京に行ったら、少しずつ教えるよ。見えない世界に渡るときに使う火と水の意味もね。日本語のカミというのは火と水の意味だよ」

「ふーん」

ふたりは二月堂を見つめて、じっと佇んでいた。辺りが暗くなってきたので、賢が愛子を促して、石段を降り、宿に戻った。蕎麦屋の前を通ると、灯りが溢れ出ていて、年越し蕎麦を求めて何人もの人たちが出入りしている。旅館に戻るとエントランスで案内係の男性が「お帰りなさいませ」と言ってふたりを迎えてくれた。愛子は嬉しくて胸がときめいた。部屋に戻ると、既に夕食の準備が調っていた。ふたりが洗面所で手を洗って席に着くや否や、仲居が姿を現した。

「東大寺さん、如何でしたか？」

「やはり、間に合いませんでした。でも、二月堂から見える大仏殿が美しくて。見惚れてしまいました」

「そうなんです。あそこは夕方がとても綺麗なので、わたしも大好きです。身体が冷えて仕舞われたことでしょう。今夜は鍋料理を用意させて頂きました。それに、年越しのお蕎麦もごぞいます。お飲み物はどうぞ致しましょうか？」

「愛子、何か飲みたいものはあるか？」

「お茶がいい」

「では、お茶をお願いします」

「承知致しました。お茶はこちらにごぞいます」

仲居はそう言いながら盆の上の急須にポットの湯を注ぎ、2つの湯飲み茶を注いでふたりの前に出した。

「どうぞ、ごゆっくりお召し上がりになってくださいませ。お食事がお済みになりましたら、フロントまでお電話を頂けますか？」

仲居が出て行くと愛子は麻子に茶を供えようと思って、骨壺に視線を移した。骨壺の前には既に小膳が置かれていて、茶と蕎麦を盛った碗が供

えられていた。愛子の目から一筋涙がこぼれ落ちた。

「この旅館のひとたち、みんな優しいひとたち。お母さんにもちゃんとお食事を用意してくれた」

ふたりは骨壺の前に跪いて両手を合わせ、瞑目した。食事はこの前泊まったときとあまり変わらないものだった。一旦席に着いた後、愛子は自分の刺身皿を持って骨壺の所に戻り、小膳に供えた。賢は箸を手にして、自分の刺身皿を取って愛子の前に置いた。愛子は賢の顔を見て微笑んだ。「賢パパ、ありがとう。このマグロおいしそう。おかあさん、喜ぶわ」ふたりは奈良の寺院の話や仏像の話をしながら食事を摂った。食事が済むと、仲居が食卓を片付けに来た。愛子は仲居に礼を言い、麻子の骨壺の前に供えたものも小膳を残し片付けてもらった。そして、新たに湯飲み茶を注ぎ供えた。片付けが終わった後、仲居は床を延べに来た。ふたりの床は1メートルほど離して敷かれた。仲居が挨拶をして立ち去ると、愛子は入り口側の布団を押して窓側の布団にくっつけた。賢はそれを見て、淋しいんだと思い、ふと哀れさを覚えた。ふたりは大浴場に出掛けることにした。愛子はクローゼットの前行くと賢の目も気にせず直ぐに衣類を脱いで下着1枚になり、浴衣を身に付けて賢に話し掛けた。

「賢パパ、この浴衣少し大き過ぎないかな」

確かに愛子は小柄だったので、ややだぶついた感じに見えた。しかし賢はそれを言わずに愛子を安心させようとした。

「浴衣だから、少しくらい大きくても大丈夫だよ。浴衣は更衣室で脱いで、籠に入れればいいよ。もし眼鏡が心配だったら、ロッカーに入れてもいいし。大浴場は、銭湯と同じようなもんだから心配ないよ」

愛子が安心したようなので、賢も直ぐに浴衣に着替えた。ふたりはエレベータで階下に降り、大浴場の前で30分後に待ち合わせる約束をして浴室に入った。愛子にとっては、はじめて一人で経験する大浴場だった。小学校の修学旅行で、クラス単位に入った大浴場は、大賑わいの中で自分の居場所を見付けるのがやっとだった。湯船に浸かったことすらはつきり思い出すことができなかった。更衣室には3人の中年の女性が脱衣

していた。愛子は浴衣と下着を脱いで、それをきちんと畳み籠の中に収めると、タオルを手にして恐る恐る大浴場の入り口の引き戸を引いた。浴室の中には若い女性が3人と、先ほどの中年の女性が3人居て、若い女性たちが湯船に浸かって談笑していた。湯船は一つだけで、それほど大きくはなかったが、愛子にはとてつもなく大きく感じられた。愛子は恐る恐る洗い場に席を確保すると、身体に湯を浴びてから、空いている方の端から湯船に入った。賢はいつものようにこの日の省察を行った。愛子が少しずつ元気を取り戻してきているのに安心感を抱いた。賢は20分ほどして男湯から廊下に出た。そこは休憩所になっていて、ソファが置かれている。賢はそこに腰掛けて愛子を待った。5分ほどして、愛子が現れた。その姿を見て賢はドキッとした。眼鏡を外した浴衣姿の愛子はあまりにも麻子に似ていた。今日一日一緒にいてもそんな風には思えなかったが、体つきといい、姿勢といい、まるで麻子だった。賢に向けてにっこり笑った顔に麻子とは違った無邪気さを見付けて、賢は胸を撫で下ろした。

「賢パパ、お待たせ。髪も洗っちゃった」

「眼鏡はどうした？」

「この中よ」

愛子は畳んだタオルを持ち上げて見せた。

「賢パパ、やっぱりこの浴衣、少し大きいわ」

「そうかな。愛子、大き目の方が大人のように、色気があるけどな」

「いやね、賢パパったら。お母さんに言いつけちゃうから」

ふたりは顔を見合わせて笑った。部屋に戻ると、愛子は洗面所に行き、暫く鏡の前で、髪を撫でたり、浴衣をいじったりしていたが、やがて戻って来て布団の上に座った。

「今日は大晦日。今、10時半。あと1時間半で新しい年よ、賢パパ」

「そうだな。来年からは愛子とは親子だな」

賢は窓際の籐椅子に腰掛けながら携帯の電源を入れた。何通もの留守電が登録されていた。祐子、亜希子、早瀬由美、数馬、野岸孝子、ゆき、藤代肇、そして和歌山警察署から、全部で13通の留守電がある。賢は

順に聞いていった。先ず祐子からの留守電を聞いた。全部で5回登録されていた。

「あなた、原智明さんが着いたわ。あなたの部屋にお通ししたわ。暫くはわたしと亜希子さんが交代でお食事や、お洗濯のお世話をすることにしたわ。また、電話するわね。あなた愛してる」

「あなた、電源切っているでしょう。早く電源を入れて欲しいわ。何かあったの？わたし、気が気じゃないわ。原さんは元気よ、彼もあなたからの連絡を待っているわ。早く電源を入れてね」

「あなた、祐子よ、今どこにいるの、今日数馬君から連絡があったの、あなたの所に電話があると思うわ。わたし、困っちゃう。何とか電源を入れてね」

「あなた、わたしよ。今日テレビで麻子さんが殺されたことを知ったわ。あなた、関係しているのね。わたし、どうしていいか分からない。下手に警察に問い合わせなんてできないし。わたしどうしたらいいのかしら。早く電源を入れて」

最後の電話は泣き声が混じったものだった。

「あなた、今年も終わるわ、どこにいるの、元気でいるの？おねがい、返事をして。わたし、あなたがいなくなったら死んじゃう」

賢は直ぐに祐子に電話を入れた。

「あなたね、どこにいるの？大丈夫？」

「もしもし、祐子ごめん。麻子さんが亡くなったんだ。詳しいことは帰ってから話すけど、今、娘さんの愛子さんと一緒なんだ」

「それは大変ね。今、どこにいるの？」

「奈良の旅館だ。愛子さんに俺の娘として生きてもらうことに決めたんだ。詳しいことは帰ったら話すよ」

「いつ戻って来れるの？」

「移転の手続きなんかがあるから、4日か5日になるよ」

「今年はおあなたとふたりで年を越したかったわ」

「ごめん、来年はいい年になるよ」

「そうね、きっとそうね。早く帰って来て。あなたを愛しているの。わ

たし寂しい」

「もう少し我慢してくれよ」

「分かったわ。身体に気を付けてね」

「おまえもな」

賢は続けて亜希子からの留守電を聞いた。

「あなた、どちらにいらっしゃいますか？電話をくださいますか？お待ちしています」

「賢さん、わたくし、祐子お姉様と交代で原智明さんのお食事などのお世話をさせて頂いています。原さんは凄い洞察力をお持ちの方です。あのかたのお話しを伺っていると、あなたと一緒にいるような錯覚を覚えますわ。早く帰って来てください。あなたに意識を向けようとしても、どこかで遮断されるような感覚を覚えます。どうなさったのかとっても心配です」

賢は亜希子に電話を入れた。

「賢さん、あなたなのですね……」

亜希子が泣き出したのが分かった。

「ごめん、亜希子、元気にしているか？」

「とっても心配だったの。どうされていますか？お体は大丈夫ですか？テレビで麻子さんがお亡くなりになったことを知りました。あなたの意識を追いしましたが、どうしてもあなたに届かなくて……」

「ごめん、4日か5日にそっちに戻るから、その時にいろいろ説明するよ。元気でいろよ」

「あなたがいらっしゃらない東京は、砂漠です。少しでも早く帰っていらしてください」

「兎に角、いろいろな心配を掛けて済まなかった。いい年を迎えてくれよ」

「あなたも」

次ぎに早瀬由美に電話を入れた。

「賢さんなのね。やっと話ができるわ。わたしとても悲しいわ。あなたがチャンネルを切ってしまうているんだもの。何か事情があったのね。わたしは5000年も待ったから、待つのは何でもないけど、チャンネ

ルは切らないで。お願いだから」

「分かった。これからは意識をコントロールするようなことはしないよ。俺もまずいとは思っていたんだが、どうしてもそうせざるを得なかった。特に君に完全に見通されていると思うと、遮断せざるを得なかった。ごめん」

「いいのよ。でもあなたの意識に繋がるのはそんなに簡単でないってことがよく分かったわ。わたしも、あなたの意識でこの世界を見ようとするようなことは止めるわ。だから、お願い、チャンネルは切らないで。とっても寂しいわ」

「分かった。もうしない。まだ、俺はそれほど強くなっていないから、今回は止むを得なかった。今の俺の意識には岩があって流れの中に淀みを作ってしまう危険性があるから……5日頃までには戻るから、そしたら、一度会おう」

「一度じゃ駄目。わたし、もう、いつもあなたに着いているわ」

「兎に角、いい年を迎えられるように祈っているよ」

「あなたも。くどいようだけどチャンネルだけは解放しておいてね」

続けて野岸孝子に電話を掛けた。

「もしもし、野岸孝子さんのお宅ですか？賢ですが」

「もしもし、賢さん。済みません、お電話を差し上げたのは他でもありません。今年わたし達を救ってくださった方に1年の締めくくりに一言お礼を申し上げたくて。本当にありがとうございました」

「とんでもありません。皆さんお元気ですか？ゆきさんや太郎君、信次君も元気ですか？それにご主人は？」

「おかげさまで、みんな元気です。ゆきがもう一度あなたにお会いしたいって言うんですよ」

電話の向こうで、ゆきが野岸孝子を制する声がしていた。

「もしもし、それから、主人のこと本当にお世話になりました。再審が確定しました。無罪になることは間違いないって法定弁護士さんがおっしゃいます。ですから、みんな来年はとっても素晴らしい年になるって喜んでいるんです。また、一度こちらにいらしていただきたいわ……」

あ、それからゆきが何か話があるって」

「もしもし、内観さんですか？ゆきです」

「ゆきさん、元気そうだね。大学に行くことにしたの？」

「ううん、わたし、このまま働くことにしたの。内観さん、クリスマスプレゼントありがとう。とても素敵なポシェット、いつも持って歩いています。太郎と信次も野球帽が気に入ってとても喜んでいます。それから、わたしからのプレゼントをお送りしたわ。その中に弟たちの手紙も入っているの。受け取ってくれた？」

「ありがとう。直ぐに開けてみたいところだけど、ごめん。いま旅行先で、暫く東京に戻ってないんだ。どんなプレゼントかな？」

「それはお家に帰ってからの楽しみよ。又電話してね。ではよいお年を」

「君もよい年を迎えるように！そして、ご家族の皆さんが幸せになるように祈っているよ」

「賢さん、本当にありがとうございます。よいお年をお迎えください」
そこで賢は一息入れることにした。愛子がじっと賢を見つめていた。賢の話の聞いていたようだ。

「愛子どうした。テレビ見てないのか？」

「賢パパ、いろんな友達がいるのね。みんな賢パパを頼りにしているみたい」

「どうして？」

「電話の話で分かるわ。みんなわたしと同じような気持ちなのかしら」
賢は布団の上にごろっと横になって俯せた。愛子が直ぐに身を擦り寄せて来た。

「賢パパ、あと50分くらいでカウントダウンが始まるよ」

「愛子、初詣に出掛けようか？」

「うん、さっき旅館の人が、大社さんがきれいだって言った。春日大社のことだわ」

ふたりは直ぐに服を着替えて宿を出た。フロントには50歳前後の番頭風の男性がいて、「行ってらっしゃいませ」と微笑んで送り出してくれ

た。外はやはり寒い。ふたりは湯冷めがしないように身を寄せ合って歩いた。通りに出ると大勢の人たちが春日大社の方向に向かって歩いている。15分ほど歩いて大社に近付く頃になると知らないうちに溢れんばかりの人の波の中に巻き込まれていた。大社の案内の看板がある辺りからは人垣ができ、もう全く動きがとれなくなった。まだ年が変わるまでに20分ほど時間があった。愛子は逸れ（はぐれ）ないように賢の左手をしっかりと握り締めている。幸い風も無く、空気はそれほど冷え切ってはいなかった。しかし、人混みの中で全く動かないまま立ち続けるのにはかなりの忍耐が必要だった。

「賢パパ、凄い人ね」

「うん、日本の春日大社だからな。初詣は100万人くらい来るのかな」

「さっきテレビで、去年が72万人だったって言ってたわ。今年はもう少し増えるって。どうして分かるのかしら」

「愛子、確率統計って知っているか？」

「ううん、知らない」

「そのうち習うよ。例えば日本中の人の中で、どの位の人が今年は春日大社に初詣に行こうとしているかを知ろうと思ったら。愛子ならどうする？」

「一人一人に聞いたら1億人位の人に聞かないといけないから、それは無理。手紙を出しても、1億枚の葉書なんて出せない。それに回収できるかどうか分からないし……うーん、分からない」

「確率は分かる？サイコロを100回投げたら、1の目が何回出たかを数える。そして一の目の出た回数を100で割った値が、1の目の出る確率っていうんだ。いいかい、分数は分子割る分母という計算だよな。じゃ、日本中で春日大社に初詣に行こうとしている人の数が計算を分かりやすくする為100万人だとするね。そうすると日本人が春日大社に初詣に行く確率はどの位になるかな？」

「うーん、100万割る1億で、……100分の1……だから1%だ」

「そうだ。1%の人がそう思っていることになるね。いいかい、ここか

らが大切なんだ。日本人の1億人は分母に来るから母数っていうんだ。そして、その母数の元を母集団って呼ぶんだ。それから春日大社に初詣に行こうとしている人たちを事象と呼んで、その100万人を事象数というんだ。すると、確率は事象割る母集団となるね。今度はこの母集団を縮めてみるよ。1億人を10万分の1まで縮めると千人、100万人を10万分の1まで縮めると10人だね。さてさっきの確率はどうなったかという、1億分の100万は千分の10になっただろう。この確率は同じだろう」

「あっ、そうか、1000人くらいの人に聞いて、その確率に10万を掛ければ、初詣に来る人の数が分かるんだ。だったら、100人に聞けばもっと簡単にできるじゃん。そのなかで一人いけば100万人ということなんだ。賢パパ。凄い。簡単なんだ」

「愛子、一寸待てよ、それじゃ10人に聞いたらもっと簡単だろう？そう思わないか？」

「簡単だけど、10人だと、初詣に出掛ける人は一人もいないって事になっちゃうかも知れないわ」

「そう、母数の数はある程度以上縮めると、確率の数が正しく計算出来なくなるんだよ。その正しさの値を信頼度っていうんだ。でも、今はこれ以上は説明しないよ。一寸ややこしくなるからね。こうやって確率を求める方法を確率統計っていうんだよ」

「賢パパ、分かった。放送局の人たちが1000人とかの人に聞いて、計算したんだ」

「そうだ。推定っていうんだよ」

人混みは段々詰まってきて、次第に周りの人から身体を押されている感覚が強くなってきた。賢は愛子が潰されないように愛子の身体を自分の方に引き寄せた。やがて参拝者が少しづつ動き始めた。人混みに揉まれて寒さはそれほど感じない。やっとなら雑踏の中に登楼の火が浮き上がって見えてきた。参道はでこぼこして歩きにくい。愛子は時々躓いていたが、人混みが倒れることを許さない。ふたりは人の波に身を任せた。大鳥居を潜る時には、特に身体が揉みくしゃにされた。

「わたし、初めて。どうすればいいの？」

「2回頭を下げて、2回手を打って1回頭を下げる。これが普通のやり方だよ。他の人と同じようにすればいいんだよ。そして、その時に昨年のお礼の心を捧げて、今年も無事迎えられたことに対して感謝のお祈りをするんだ。そしてお願いごとと一緒にな」

万登楼の灯りに照らされた朱塗りの柱が見事だった。やっと拝礼の番が巡ってきたとき、愛子は麻子の写真を手にしていた。賢が愛子に10円玉を渡し、自分も手にした。賢が10円を賽銭箱に投げ入れたとき、愛子は10円玉を2回投げ入れた。自分でも用意していたようだった。初めに投げ入れたのが麻子の分だと賢には分かった。賢は1年の感謝と今年も生かして頂けたことに感謝をし、麻子の冥福と全ての人たちの幸福を祈った。愛子は写真を手に持ったまま合掌し母の冥福と賢と一緒にいられることへの感謝、そして、中川恭一の罪が許されることを祈った。祈りが少し長かった為に、ふたりは後ろの人たちに押し退けられるようにして、帰りの人波に流れ込んだ。

「今度は普通の日に来たいね」

「うん。賢パパ、又連れて来て」

ふたりがやっとの思いで人波みから逃れ、宿に戻ったのは1時過ぎだった。旅館に入ろうとした時、不意に入り口から黒いコートに身を包んだ男性が端にカメラを取り付けた3脚を右手に持って出て来た。賢ははっとした。賢の目にもその3脚がハンマーに見えた。賢は直ぐに愛子の方を向いた。恐れていた通り、愛子は硬直したように佇んでいる。

「愛子、大丈夫か？」

その声に刺激でもされたように、愛子の身体は小刻みに震え始めた。賢は急いで愛子を抱えるようにして、旅館の入り口を入った。愛子は震えながらも何とか足を運んだ。賢が愛子の靴を脱がせて框を跨ぐと、先ほどの番頭風の男性が心配そうに声を掛けてきたが、賢は大丈夫だと言って、愛子を抱きかかえながら階段を上がり部屋に戻った。部屋に入ると賢は直ぐに愛子をしっかりと抱き締めた。愛子の身体は冷たかった。賢の胸の中で愛子はがたがた震えている。顔からは血の気が引いていた。一

気に寒さが襲ってきたようだ。

「愛子、大丈夫だよ。あの人はカメラと3脚を持っていただけだよ。怖くなんかないよ」

賢は右手で愛子の頭を自分の胸に引き付けた。愛子は暫く震えていたが、やがて落ち着いて来ると、目に一杯涙を溜め、嗚咽を発して泣き崩れた。

「大丈夫だよ。僕がいるから。心配しなくていいよ。身体がこんなに冷たくなっちゃって。お風呂に入ったらいいよ」

「賢パパ一緒にいて、わたし怖い」

賢は愛子の手を引いて浴室に行き、浴槽の栓を閉め、給湯口のcockを開けた。そうしておいて、ハンドタオルを手にとると、愛子の頬を優しく拭ってあげた。愛子の顔は涙でくしゃくしゃになっていた。賢が顔を拭いているうちに愛子の顔から漸く怯えが消えていった。

「さあ、お風呂に入りなさい」

「賢パパも一緒に来て。ずっと近くにいるよ」

愛子は賢の左手を引いて洗面所に行きそこで眼鏡を外して、衣服を脱いだ。賢はそこで待っているつもりだったが愛子が一緒に入ってくれと執拗に頼んだ。賢は仕方なく、自分も裸になり、ふたりで浴室に入った。麻子と共に過ごしたときの事がありありと思い出されてきた。眼鏡を外した愛子の姿は麻子そのものだった。しかし乳房の張り方や腰回りのなめらかさがやはり若い娘の肢体だった。浴室に入ると湯は湯船の半分ほどになっていた。賢は愛子を小椅子に座らせて、洗面器で湯船から湯を汲み、背中に静かに掛けてやった。

「さあ、中に入りなさい。ここに居てあげるから。大丈夫だよ」

賢は自分の身体も冷え切っていることに気付き、湯船が一杯になるのを待って給湯のバルブを閉めると、直ぐにシャワーを使って自分の身体を温めた。愛子は心地よさそうに10分ほど湯船に浸かっていた。賢がシャワーを止めて、湯船を見ると、そこにいるのは正に麻子だった。2月前の情景が蘇ってきた。賢の身体はいやが上にも反応してしまった。愛子は湯船の中から興味深そうに見つめていたが、やがて湯船から上がると、賢の手を引っ張って浴室から出た。賢は自分の意識の錯覚を振り解

いて、バスタオルを取って愛子に渡した。愛子は身体を拭いながら、自分に背を向けて身体を拭いている賢に言った。

「賢パパ、どうしてあんな風になったの？」

直接的な質問に賢はどう答えていいか分からなかったが、苦し紛れに言った。

「おまえが、お母さんにそっくりだったからさ、だから錯覚を起こしちゃったんだ」

「ふーん。自然にああなるの？」

「・・・まあ、いいから、早く浴衣を着て寝なさい」

「うん」

愛子はタオルをタオル掛けに戻し、裸のままクローゼットまで行くと、浴衣を羽織り、布団に潜り込んだ。賢は愛子が布団に入ったのを見てからクローゼットの前で浴衣を身に付け、麻子の遺骨の前で祈りを捧げ、灯りを消して布団に入った。室内は暖房が通っていたので、布団が随分暖かく感じられた。とその時愛子が急に起き出して、骨壺の前に行き祈りを捧げた。暫く祈っていたが、やがて振り向くとさりげなく賢の布団の中に潜り込んで来た。愛子は自分の身体を賢に擦り寄せて、顔を賢の胸に埋めた。

「賢パパ、今日はここで寝ていいでしょう。ずっとだっこしていて。怖くて一人じゃ眠れない」

賢は愛子の肩を抱き寄せた。軟らかい女性の身体が賢を刺激した。麻子の姿が脳裏に描き出された。賢は自分の身体に反応しないように意識を向けた。しかし、やはり興奮を抑えることは難しかった。

「おれは、未熟だ」

愛子は賢の胸の中で安心し切って、寝息を立てて寝入ってしまった。賢もいつしか眠りに落ちたが、愛子が寝返りを打とうとして肘で賢の胸を押ししたとき、はっとして目を覚ました。愛子は浴衣の前をはだけて寝っていて、乳房が顕わになっていた。賢は愛子の浴衣の襟を直す為に起き上がろうとしたが、その時愛子が賢に抱きついてきた。賢は愛子の腕を解き、何とか愛子の浴衣を直した。愛子は何事もなかったように寝息を立て

てて寝ていた。賢はそのまま、愛子から意識を切り離してしまった。賢が目を覚ましたのは7時過ぎだった。賢は優しく愛子の髪を撫でた。愛子は賢の腕の中で目を覚ました。そして、再び賢の胸に顔を埋めた。賢は愛子の肩をしっかりと抱き締めた。

「さあ、起きようか。いよいよ新しい年だね」

「賢パパ、もう少しこうしていて」

賢の胸の中で、愛子はもぐもぐと話し始めた。

「わたしね。賢パパの養女にはならないことにしたの。もし、養女になったら、賢パパのお嫁さんになれないでしょう。わたしは、わたし一人じゃないの。お母さんも一緒なのよ」

「でも、それじゃ、学校に通うのに困るだろう」

「ううん。賢パパと一緒に住むのは変わらないわ。いいでしょう。わたしは、賢パパのお嫁さんになれるように、いろいろ勉強するのよ。お料理も、お洗濯もみんなわたしがやるわ。大人になったらね、お嫁さんになれるようにするの。だから、きょうから賢パパって言わないわ。前のように賢さんって呼ぶことにしたの。ねえ、いいでしょう」

「そうすると、こんな風にだっこして寝てあげることではできなくなっちゃうよ。僕の娘だからこうして一緒に寝たり、お風呂に入ったりできるんだよ」

「賢さん、それは、今迄の慣習に捕らわれているからじゃないの？」

賢はドキッとした。まさか愛子からそんな言葉を聞こうとは思ってもなかった。正にその通りだった。しかし、外から見るとふたりが異常な関係に見られることは疑う余地のないことだと思った。

「よし、こうしよう。まず愛子は僕の娘になる。そして、愛子が大人になっても、まだ僕のお嫁さんになりたい気持ちが残っていて、僕が愛子のことをお嫁さんにできると判断したら、その時は養子縁組を解消して、また、もとの他人に戻る。これなら、誰も、何とも言わないし、今の社会の形にも合っているだろう。愛子だって、新しい学校にずっと通い易いだろう」

「分かった。だけど、わたしには氷点があるのよ。それにトラウマもあ

るし。それでもわたしを娘にしてくれる？」

「それは大丈夫だ。氷点は僕のハートで暖めて、愛子が凍らないようにするし、トラウマの様に手強い獣だって、僕が退治してやる。やりがいがあるじゃないか」

愛子はぱっと起きあがって、自分の布団の上に正座した。

「賢パパ、大好き」

「よし、起きよう」

「はしたない娘ですが、本年もよろしくお願いします」

愛子は布団の上に両手を突いて頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくね」

賢は数馬に電話を入れた。

「おお賢か、また何処に隠れていたんだ。みんな心配しているぞ。まあ、今年もよろしく頼むぞ。いや、今年からは特にお前には世話になりそうだ」

「数馬、今年もよろしく。連絡しなくて、済まなかった。毎度のことで、もう慣れたんじゃないか？」

「馬鹿言え、こっちはいつも大騒ぎになるんだぞ。大体、お前がいなくなるときはいつも何か事件が起きるじゃないか。今度も麻子さんが亡くなっただろう。一体どうなっているんだ」

「5日までには帰るから、それから話すよ。それより、亮子さんは元気か？」

「ああ、元気元気、張り切って結婚の準備をしているよ。俺も、今から尻に敷かれそうだよ」

「結構なことだ。亮子さん、この前身体をこわしたから、大事にしてやれよ」

「あたりまえじゃないか。今は彼女のことがプライオリティナンバーワンさ。ところでお前、藤代社長に電話したか？」

「いや、まだだ。これから電話しようと思っている」

「なんだか大事な話があるようだぞ、俺の所にも居場所を知らないか問い合わせてきた」

「そうか、分かった。じゃ、東京で会おう」

賢は直ぐに藤代肇に電話を入れた。

「もしもし、賢です。藤代肇さんのお宅でしょうか？」

登紀子が電話口に出た。

「あら、内観さん、どうしていらっしゃったの？」

「本年もよろしくお願ひ致します。連絡を絶って申し訳ありませんでした。今、奈良に居ます」

「ええ、それは祐子から伺ったわ。いろいろ大変でしたわね」

「はい。失踪事件の当事者だった麻子さんが亡くなって、その娘さんの愛子さんとは今後のことをいろいろ相談したり、手続きしたりしています。正月休みが間に入ってしまったので、役所が開いたら手続きを済ませて、直ぐに東京に戻ります」

「そうでしたか。ただ今、藤代を呼んで参りますから、お待ちくださいませ」

少しして、藤代肇が電話口に出た。

「もしもし、内観さんか？」

「はい、内観です。本年もよろしくお願ひ致します」

「こちらこそ、よろしく頼むよ。ところで、今度のプロジェクトのことだが、やはり一度会社の方に顔を出してくれないか？変な探りを入れてきている輩がいるようなんだ。いよいよ、いつでも君と連絡を取れるようにしておかなくてはまずくなってきた。それに、直ぐに行動に出られるようにしておく必要もあるし」

「はい、わたくしもそう感じています。今度の事件のことも含めて、帰京したら報告させていただきます」

「うん、分かった。5日の午後7時に我が家に来られるか？」

「はい、伺います」

「じゃ、待っている」

「はい。それでは、失礼致します」

最後に賢は和歌山警察署の指定された電話番号に電話を掛けた。

「もしもし、内観と申しますが。電話をいただいていたようですが、何

かご用件がおありでしょうか？」

「もしもし、内観さんですね。亡くなった生島麻子さんの長女愛子さんの所在が分からなくなっているのですが、ご存じありませんか？」

「はい。愛子さんなら、今、僕と一緒にいます。奈良の奈良小道旅館に滞在しています」

「どうして、あなたと一緒にいるのですか？」

「はい、愛子さんは孤児のような状態になってしまいましたので、わたしが養女として後見人になることにしました。役所が休みですから、正月明けに東京で手続きを取ろうと思っています」

「そうですか。学校の手続きをされたのもあなたですか？」

「はい、愛子さんと一緒にいろいろ手続きをしています。生島麻子さんの遺骨もこちらに持参しています」

「殺人犯の中川恭一があなたへの恨みを抱いていたようですが、そのことはご存じですか？」

「はい、存じています。麻子さんが中川恭一さんと離婚して直ぐに、身体の具合を悪くした為に、わたしが東京から和歌山のアパートに急行したんですが、それを知って逆上したようです。でも、本当にあの時は麻子さんの身体は危険な状態にあったんです。何とか持ち直して、ホッとして僕が留守にした時、あんなことになってしまいました」

「それは分かっております。和歌山にはいつ戻られますか？」

「2日後の1月3日までには戻ります」

「その時和歌山警察署に寄って、もう少し事情をお聞かせいただきたいのですが」

「分かりました」

愛子は賢が電話を掛けている間に、身繕いを調べ、布団を畳み、昨夜の浴室前のタオルを整え、浴槽の湯を抜いた。それから、おもむろに麻子の遺骨の前に茶を供えて瞑目してから、座卓の前に座って賢を待っていた。

「賢パパ、電話済んだ？」

「うん。愛子、片付けてくれたのか？」

「うん、ちょっとね」

「そうか、ありがとう。じゃ、食事に行こう」

廊下から大広間まで、宿中に正月の気分を高揚させる紅白・金銀の飾り物が飾られていて、琴の六段が流れている。和室の大広間に用意されている食事は元旦を感じさせるものだった。紅白の熨斗(のし)が敷かれており、屠蘇の入った杯が添えられている食卓には、おせち料理とズワイガニの足3本、焼き魚の代わりにイボダイが用意されている。

「わあ、凄い、お正月の支度が出来てる」

仲居が寄ってきて御飯か、雑煮かと聞いた。ふたりは雑煮を頼んだ。愛子は下げてきた布袋を開いて、その中から麻子の写真を取り出し、食卓の上に置いた。

「お母さんと、一度でいいからこういうお正月をしてみたかったわ」

賢達とほとんど同時に来た4人組の家族は、2席離れた所に着席して、屠蘇で乾杯をしている。賢は仲居に頼んで、屠蘇の杯をもう一つ用意してもらった。賢はそれを愛子が置いた麻子の写真の前に供えてから、自分の杯を手にとると、愛子にも杯を取って渡し、促すようにして、「これからずっと、よろしくな」と杯を掲げた。愛子も「よろしくおねがいます」と小さな声で言った。賢はそれと同時に意識に強く押し寄せてくる自分に対する感情の波を感じた。それが愛子からの感情だけではなく、祐子と亜希子から来ているような気がした。賢はふと、実現しなかった祐子や亜希子との約束—安曇野への旅行のことを思い、ふたりに済まないことをしたと思った。愛子に目を移すと、愛子は恐る恐る舌で屠蘇を舐めている。

「愛子、感想は？ どうだ？」

「一寸変わった味。でも、嫌いじゃない」

「お屠蘇は飲んだことないのか？」

「わたしの家はお正月をお祝いしたこと無かったの。暮れにお母さんがおせち料理を作ってくれて、元旦はお雑煮を作ってくれたわ。でも、お正月のお祝いのような感じじゃなかったわ。毎年お正月の朝は、ご飯の後で、前のお父さんが正月の集会があると言って、わたしたちを連れて

学会の会館に行ったわ。それがお正月の行事だったの。そこではみんなでお経を唱えたりしていて、その後で、皆でお昼のお食事をするんだけど、日本のお正月といった楽しい雰囲気じゃなかった。だから、学校の友達とはお正月のお話しをしないようにしていたわ。わたし、お屠蘇も初めて。お酒でしょ。一寸どきどきする。賢パパ、飲んでも大丈夫かな？」賢は愛子が愛らしく思えた。少し恥じらいながら屠蘇を舐め、それだけで顔を紅潮させている。ふたりは1時間ほど掛けて、ゆっくり朝食を摂った。大広間に集っているどのグループもゆっくり食事をしているようだった。朝からワインやビールを飲んでいるグループもあった。食事を済ますと、ふたりは直ぐに出掛けた。愛子は中宮寺に行きたかった。

「わたし、修学旅行で法隆寺に行ったわ。希望者が大宝蔵院のグループと中宮寺のグループの二つのグループに分かれたの。わたしは、中宮寺のグループに入ったわ。中宮寺は法隆寺の奥にある別のお寺で、そこには如意輪観音半跏像というとっても素敵な菩薩像があるのよ。今でもありありと思出すわ。わたし、一目見た途端に感動してその場から動けなくなっちゃったの。先生に言われて、やっとの思いで本殿から出たのよ。もう一度あそこに行ってみたい」

「僕と同じだ。僕も一度あの菩薩半跏像を見て感動した。大分前の話だけどね。あの像を見ていると、まるで重さがないような感じを受ける。自分の意識まで、軽くなって浮遊しているような気がしてくる。それなのに落ち着くんだ。あれは女性像だろう。あそこは尼寺だからな。ほとんどの日本人はあの像に心が惹かれるんじゃないかな」

法隆寺までは時間が掛かった。バスは途中、ついこの間麻子とふたりで来た薬師寺を経由した。無邪気にはしゃいでいた麻子の姿が浮かび上がってきた。修学旅行の小学生が大勢いて、賢達を冷やかしたりした。それはそれで楽しいものだった。しかし、賢はできるだけ麻子に意識を集中させないように努めた。帰霊するのを妨げたくなかった。法隆寺に着いたのは10時過ぎだった。外は、身を切るような寒さだった。ふたりはバスを降りるとすぐに体を寄せ合って参道に向かった。バスの通る国道から北に向かって2つの車道が走っていて、その両側の車道の間に青

松の並木があり、その中央に舗装されていない参道が南大門まで続いている。参道の突き当たりには石段があり、訪れる人たちを迎え入れる南大門の左右両脇に、両手を広げるように延びている「大垣」がふたりを迎え入れてくれた。三間一戸の八脚門、深い屋根を持つ単層入母屋造の南大門を潜ると、参道脇の築垣（ついがき）で取り囲まれた石畳の参道が続き、奥の中門へ向かい、やがて十字路に出合う。そこから右奥が東大門、左手に西大門があり、正面が回廊で囲まれた西院伽藍の中門である。夢殿に通じる東門への参道はあまりにも遠くに感じられた。正面の中門は締まっているが、左手に折れて少し行くと金堂と五重塔のある回廊に通じる入り口がある。この日参詣に訪れている人たちはほとんど若いカップルのように見えた。ふたりはその中に混じって左方向に進んだ。小気味よかった。いつしか愛子が賢の左手に自分の右手を絡ませていた。沢山のカップルに混ざり、自分達ふたりもカップルなんだと言わんばかりだった。賢は愛子に抗わずに自然に振る舞った。石段があり、そこを上がって、受付で入場料を払って右に進むと広い空間が開けた。愛子は眼前に広がった境内をととても広大に感じた。均整の取れた五重塔と、美しい佇まいの金堂が目飛び込んできた。世界最古の木造建造物といわれる建物だ。その奥に大講堂がある。ふたりにとって金堂が火災に遭って再建されようが創建当時のままだろうが、そんなことはどうでもいいことだった。長い間の人々の想念がもたらした静寂な、落ち着いたのある空間である。愛子は薬師寺からずっと感じ続けていた麻子を、更に強く感じるようになっていた。賢もその強い麻子からの意識の流れを受け入れた。麻子が近くに寄り添っている様な、こそばゆさに似た不思議な感覚だった。金堂の本尊は莊嚴だった。罪深い人々を穢土から浄土に救い上げると信じられている釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来の三体の本尊仏像の作る空間が仏教で定められた雰囲気醸し出している。ふたりは修復された壁画を眺め、金堂から外に出た。法隆寺は大勢の参詣者で賑わっていた。それから五重塔の周りを巡り、入ったときは反対側の回廊の端まで行くと、そこでは記念品を販売していた。賢は愛子に鈴の付いたお守りを買って渡してから伽藍の外に出た。外に出ると左手奥に東

大門が見える。そこまではかなりの距離である。愛子は賢をすっかり恋人にしてしまった。さっきは愛子が大勢のカップルの真似をしたのだが、今は多くのカップルが自分達に似ているように見えてきた。東大門でもやはり入場料を払った。夢殿は外から眺めるだけだった。四方の扉が開いていたが、覗いてみても特に驚くほどのことはなかった。夢殿はそこに存在しているだけで素晴らしかった。入り口の説明書きに、「秘仏救世観音像を安置したこの八角形の建物では「十一面観音悔過」とよばれる法要が行われる」と書いてあった。

「ここでも十一面観音さまを讃える行事をおこなっている」

愛子は長谷寺と東大寺の二月堂を思い出していた。

「わたし、十一面観音様のことを思うと、身体が温かくなってくるような気がするの。何だか、幼い頃お母さんに抱かれている自分の姿が、今の自分に重なってくるの」

「おまえのお母さんがその観音さまなのかも知れないな。知らない内に十一面観音に関係したところに来ているしね。慈悲の象徴だ。きっとお母さんは永遠の愛でお前を慈しんでいるんだよ」

愛子の目が潤んだ。賢も身体の底の方から熱いものが突き上げてくるような感覚を覚えた。たとえ仏教の教義が何を教えていようと、観世音菩薩の慈悲は図り難いものであることに変わりはない。ふたりは感慨を覚えながら中宮寺に向かった。ここもやはり入場料を支払わなければならなかった。正月なのに寺男が本堂の周囲の堀を清掃している。その回りをぐるりと廻って、本堂への木の階段を上り中に入った。拝殿には既に大勢の人たちが正座していて、思い思いに如意輪観音半跏像に見入っている。中には両手を合わせて瞑目しているものもあった。音を立てるものは一人とてなく、静寂な空間だった。突然愛子が言った。

「お母さんよ。あの仏様、お母さんよ」

周囲のものが一斉に愛子の方を振り向いた。ふたりは恥ずかしそうにしながらも人々に附いて中に入った。拝殿では最後尾に席を取って、ふたりはそこに腰を下ろした。確かに亡くなった後でふたりの前に見せた麻子の姿にはこの如意輪観音像の雰囲気があった。女性の慈愛に溢れた姿

だった。賢は如意輪観音像を見つめた。じっと見つめていると、この像がこの実在の世界と虚存在の世界に跨って(またがって)存在しているように見えてきた。意識を活性化させて生きると実存在と虚存在の両方を見通すことができることが、賢には次第に分り掛けてきている。その意識とは一体何なのだろうと思った。意識とは魂、即ち自分自身のことなのだろうか？この如意輪観音半跏像が現実界に生きるものにそれを伝えているように思えてきた。以前この像を目にしたとき、もしかしたらこの像には重さが無いのではないかと思ったが、それがまさに虚存在として同時に、ここにあることを物語っているようだった。だから愛子にはこの像が麻子に見えたのだと思った。賢は愛子の耳元で囁いた。

「あれはお母さんだよ、だけど、いつかおまえ自身にもなる」

愛子はきょんととしていた。次第に人が前方ににじり寄って行き、10分ほどすると賢と愛子は最前列にまで出ることができた。最前列で、如意輪観音像を見つめている愛子の目から涙が溢れ出てきた。愛子は声を抑えて泣き崩れた。賢が愛子の肩を抱き寄せて、ハンカチで愛子の涙を拭いてやった。愛子は音を立てずにしゃくり上げながら、泣き続けた。賢がふと視線を菩薩像に移すと、そこには麻子が微笑んでいた。菩薩像と同じ姿勢で愛子と賢に微笑み掛けている。愛子はこの拝殿に入った時から、麻子の姿を見ていたのだと分かった。賢は自分たちが別空間に移ったことを知った。愛子も涙に濡れた目で麻子を見つめている。麻子が話し掛けてきた。

「わたしはいつもあなたたちふたりと一緒に居るのよ。指導霊とおっしゃる方がどこからともなくお見えになっておっしゃっていたわ。自分というのは生前の肉体でもなければ、死後の霊体でもないんだって。本当の自分は目覚めて、意識している自分で、それは肉体や霊体とは独立したものなんだって。思ったり、考えたりしているのも本当の自分じゃないんだって。意識を目覚めさせているとき、総てに気付いているのが自分自身なんだって。あなたたちが今見ているわたしの姿も本当のわたしじゃないわ。如意輪観音像に姿を映したわたしの映像なの。優しく叡智溢れたあなた、あなたなら分かってくれるでしょう。愛子にはまだ少し

難しいかもしれないけど。おとうさんから教えてもらいなさい」

そう言うと麻子の姿はすっと消えて、元の如意輪観音像だけが半跏の姿で鎮座している。愛子の意識も現実界に戻っていた。賢は愛子に視線を向けた。愛子と目が合うと、意識が戻っていることを確認し、軽く頷いて立ち上がった。30分ほど経っていた。拝殿はまだ大勢の人で一杯だった。ふたりは歩きながらも、暫く美しかった麻子の姿と、まだ心に響いている言葉の余韻を味わっていた。ふたりが旅館に戻ったのは午後5時過ぎだった。中宮寺から途中慈光院に寄り、そこで一時（ひととき）を過してから、宿の近くの東大寺の大仏殿に寄って戻って来た。奈良の都は艶やかさはないが、社会が多様に変化して行く長い時の流れの中で、それを達観しているような安定感を感じさせてくれると賢は思った。宿の旅行案内に中宮寺の如意輪観音が十一世紀に創設されたと書いてあったが、何故か大自然から生まれ出ずる慈悲の心を味わったような気がした。それはずっと昔に意識の表舞台から姿を消した人間の本质だと思った。ふたりは一旦部屋に戻って、直ぐに浴衣に着替え、大浴場に出掛けた。賢は湯船に浸かると、いつものように一日の省察と瞑想を始めた。感情の起伏の少ない穏やかな1日だった。一通りの省察を終えると、愛子の今後のことを思案した。東京で、安寧に過ごさせる為にはどうしたらよいかを考えた。それからしばし、愛子の思いに意識を集中した。すると次第に、賢の眉間に、今いる湯船とは異なる湯船が映しだされ、窓越しに2本の松と10本ばかりの赤い実を付けた万両の子株が浮かんで来た。その向こう側に竹垣がある。それは明らかにこの男湯の窓の外に見える竹林の庭を形作ったものとは異なっていた。その映像は次に、湯船の中の2人の女性の姿を捉えた。若い2人の女性だったが、2人とも直ぐに湯船から出て行った。そして、また2人の女性が湯船に入って来た。その中の一人の女性が近付いて来て、そこでイメージは途切れた。賢は愛子の意識に連結して、愛子の周りの景色を見ていたのだということが分かった。賢はこれは巫希子が青森で行った透視とは異なるものだと思った。この世界が写像の世界であるなら、自分の中にスクリーンを設ければ、そこに自分が視たいと思う場所の情景を、他人の意識を介さ

ずに、映し出すことが可能なはずだと思った。問題はそのスクリーンをどの様にして作ればいいのかということだ。戯れに考えを巡らせてみた。賢ははっと気が付いた。そのスクリーンはこの実世界に作るのではなく、虚空間に作るのだと思った。やはり、実世界から虚空間を覗き観ることができるか否かが、ポイントになると思った。そしてそのスクリーンについては原に相談してみようと思った。賢が男湯の入り口の引き戸を引いて外に出ると、既に愛子が湯から上がって待っていた。

「お風呂はどうだった？混んでなかったか？」

「ううん。わたしを入れて5人だった。でも直ぐ2人出て行ったから、そのあと3人だけになったの。小母さんに話し掛けられたわ。わたしが、どうしてお正月に奈良に来たのかって」

「で、何て応えた？」

「骨休めって言ったの。そうしたら、2人の小母さんが大笑いをしたの。わたしとっても恥ずかしかったわ。本当のことなのに」

「きっと、元気そうな少女が、骨休めなんて言ったので可笑しかったんだろう」

「そうみたい。だけど、本当のことなのに……だから、「お母さんが亡くなって、大変だったので、その骨休めなんです」って言い直したら、2人ともびたっと笑うのを止めて、「それは、大変だったわね。笑ったりしてごめんなさいね」って。わたしもつい、涙ぐんじゃった。でも、それからは小母さん達、わたしから遠ざかってしまったの」

部屋での食事が済んだのは7時半過ぎだった。特別メニューとして万葉粥が添えられていた。仲居は万葉粥も小皿に入れて遺骨の前に供えてくれた。その晩は愛子は穏やかに自分の床で休んだ。しかし、賢は真夜中に愛子の苦しそうな呻き声で目を覚ました。あまりにも苦しうなので、愛子を揺すり起こした。愛子は目を開けると怯えたように布団に包まって震えだした。

「愛子、どうしたんだ。何か怖い夢でも見たのか？」

愛子は震えながら、布団にうずくまったまま言った。

「鬼が斧を振り翳して追い駆けて来たの。周りにいる人たちを次々に斧

で斬り倒して迫って来るの、怖かった。……賢パパ、そっちに行ってもいい？」

「おいで」

愛子は直ぐに賢の床に潜り込んで、賢の胸に頭を埋めた」

「怖かっただろう。もう安心だ、僕が付いているから」

「うん」

愛子は暫く眠れずに、もそもそ身体を動かしていたが、賢が肩を抱きしめてやると、いつしか眠りに落ちた」

和歌山に戻ると、ふたりは先ず警察署に寄った。担当の警察官が、愛子の無事と賢の住所や氏名などの確認を行った。警察署では、賢に麻子との関係などを聞こうとしていたようだが、賢は四月に愛子共々自分の籍に入れるつもりだったとだけ説明し、詳細の説明を逃れた。五日までに全ての手続きを済ませて帰京しなくてはならない旨を説明し、解放してもらった。警察官は愛子だけを別室に呼んで、賢や中川恭一のことについて30分ほど聞いた。その間、賢は待たされたが、待っている間に高齢の警察官から中川恭一の怨恨の原因について執拗に尋問を受けた。賢はただ、中川恭一の麻子に対する暴力から麻子を守ろうとしたことだけを述べた。警察官も賢の受け答えに、付け入る隙を見いだすことができなかった。一時間半ほどで漸く警察から解放されたふたりは、もう一度愛子の学校に立ち寄り、挨拶をすることにした。学校には当直の教師しか居なかったので、校長と担任に謝辞を伝言して、ふたりはそのまま和歌山駅に行き、阪和線の特急で新大阪に向かった。愛子は骨壺を膝の上に載せ両手で抱きかかえ、口を結んだままじっと外を見ている。放心したようなその視線は空間に固定されて、移り行く木立や家並みを見ているのではなかった。新大阪駅で新幹線に乗り継ぐときも愛子は一言も話さずに賢の後に従った。新幹線の指定席は東京に戻る帰省客でほぼ満席に近かった。賢は愛子を窓際に座らせると、トラベルバッグを荷物棚に置いた。愛子は骨壺と一体になったようにそれを抱え込んでいる。賢は愛子をそっとしておくことにした。豊橋を過ぎる辺りで、愛子は瞼を閉じ、そのまま眠りに落ちていった。賢は目覚めていた。静岡を過ぎた頃、席

を立ってデッキに行くと、祐子に電話を掛けた。祐子は直ぐに応答した。

「あなた、待っていたわ。どうしていたの？いま、どこから？」

「新幹線の中からだ。静岡を過ぎたところだ。元気だったか？」

「うん。だけど、寂しくて死にそうだったわ。ねえ、のぞみ？」

「うん、のぞみだ」

「わたし、迎えに行くわ。必ず行くから、JRの連絡口の改札を出たところにいるから」

「うん、わかった。あつ、それから、愛子さんを連れて来たんだ。自分の養女にすることにしたんだ。詳しいことは後で話すよ」

「わかったわ。待ってる」

電話を切って席に戻ると、愛子が不安そうにきょろきょろしていた。

「目が覚めたな。ちょっと電話して来たんだ。どうだ、気分は？弁当を食べようか？」

「うん。賢パパ、わたし何となく心配で、これからどうしたらいいのか不安で」

「僕を信じて任せておけばいいよ」

そういうと賢は荷物棚にあるトラベルバッグの中から駅弁と、ペットボトルの茶を2つずつ取り出し、自分の席の上に置いた。

「愛子、僕がお母さんを抱いているから、先に食事をしなさい」

愛子は黙って頷くと、ずっと抱いていた骨壺を、まるでガラス細工の入った箱でも扱うような手つきで賢に渡した。賢は骨壺を受け取ると簡易テーブルを下して一旦骨壺をその上に安置し、弁当2つ、そしてペットボトル2つを順に愛子に渡してから、テーブルを戻し、骨壺を膝の上に載せて抱えた。愛子はペットボトルを二つ窓の欄干に置き、二つの弁当をテーブルに並べて置いた。それから、両方とも紐を解いて蓋を開けた。一つの弁当は鶏のから揚げとえびのムニエル、もう一つの弁当は幕の内である。

「賢パパ、どっちが好き？」

「愛子、自分の好きなほうを食べなさい」

愛子は箸を取り出すと、幕の内弁当の白身魚の煮つけを摘まんで、賢の

口に持っていった。賢は「ありがとう」と言ってそれを頬張った。それから愛子は賢が魚を飲み込むのを見計らって、ご飯を摘まみ、また賢の口元に持っていった。

「僕は、後でいいから、自分が先に食べなさい」

門前仲町 2

賢達が東京駅に着いたのは午後 2 時半過ぎだった。JR への通用口を出ると白いコートに身を包んだ祐子がすぐに駆け寄って来た。その後から原と亜希子がゆっくり近付いて来た。祐子が直ぐに声を掛けた。

「お帰りなさい、あなた。こちらが愛子さんね。崎野祐子、いえ藤代祐子です。よろしく。お母さんを亡くされてさぞ悲しいでしょう。お悔やみ致します」

祐子の言葉に愛子は涙を浮かべた。亜希子も祐子に続いて、

「賢さんお帰りなさい。愛子さん、はじめまして、藤代亜希子と申します。愛子さん、大変でしたね」

とだけ挨拶した。原は真剣な眼差しでじっと東京駅の雑踏の中の 4 人を見つめている。

「愛子と申します。よろしくお願ひ致します」

愛子は骨壺を腰元まで下げて丁寧に頭を下げた。3 人は目に涙を浮かべながら骨壺を抱く愛子の姿に、次の言葉を見失ってしまった。

「みんな、元気だったか？ 大分留守にして申し訳なかった。原さん、よく来てくれました。連絡できなくて済みません」

賢が原智明の方を向きながら言った。賢を出迎えるときは必ず元気にはしゃぐ祐子も、ただ「じゃ、行きましょう」と 4 人を促して歩き始めた。歩きながら祐子が賢の方を振り返って言った。

「食事は済ませたの？」

正月明けで人の流れが激しくなった東京駅の中を 5 人は祐子を先頭に歩いた。3 人は三々五々愛子に話し掛けたが、麻子のことは意識して口にしなかった。賢の部屋に着いたのは午後 3 時半を過ぎた頃だった。部屋はきちんと片付いている。賢は「祐子と亜希子がいつも清掃していた

のだろう」と思った。愛子を促して骨壺を書棚の中央に安置させると、荷物をソファの陰に置いた。

「まだ麻子さんが亡くなってから1週間しか経ってないんだ。今日は喪に服して静かに夜を過ごそう」

「そうね。でもどうして、こんな悲劇が・・・」

祐子が言った。

「みんなニュースで聞いている通りだよ。悲しいが済んでしまったことだ。もうそのことは忘れよう。麻子さんはとっっても心の優しい人で、愛に溢れた方なんだ。だから死んだ後、純粹意識で描き出された世界に向かうはずだ」

そのとき、今までほとんど口を噤んでいた原がぼつりと言った。

「亡くなった麻子さんとコミュニケーションができたのですか？」

「ええ、何度か。これは、ぼくと麻子さんとの間の交信と、愛子を交えた3人の交信とあるけどね・・・そうだ、紹介するのを忘れたが、これから愛子は僕の娘になるんでよろしく頼むよ。今から区役所に行って、愛子を僕の養女にする手続きをして来る」

亜希子と原は驚いたような顔をした。祐子は黙って頷いた。

「愛子、こちらは原智明さん。お前同様一度鹿児島で失踪して、帰還できた方だ」

「はじめまして、わたしは愛子と申します。お噂は父から伺っております」

この愛子の自然な挨拶に皆同時に反応した。とは言っても、それぞれ感じたことは違っていた。祐子は咄嗟に賢の方を向いて、確かめるように賢の瞳を凝視した。自分と賢との間に、不透明なシールドが出来たような気がした。祐子が用意したオレンジジュースを一息で飲み干すと、賢は養女申請の手続きをする為に出掛けた。賢を入り口で見送った祐子と亜希子は戻って来ると、言い合わせたようにふたり揃って骨壺の前に行き、両手を合わせて黙祷した。原はソファに座ったままその場で瞑目した。瞑目を解くと原は愛子に向かって話し掛けた。

「愛子さん、さっき内観さんが言ったように僕も一度失踪しているんで

すが、あなたが失踪したときのことを少し聞かせていただけますか？」
愛子は祐子たちが骨壺の前に立っている間ずっと下を向いていたが、ゆっくり顔を上げて、原を見据えるようにして応えた。

「わたし、自分がどうなったのかわからないの。夕食の時、母と前の父が言い争いを始めたの。わたし、両親に仲良くしてほしかった。だってそうでしょう。わたしに命を与えてくださったお父さんとお母さんなんだから。前の父が母を責める語調がだんだん激しくなってきた、とうとう父が切れたの。そしていきなりこぶしで力いっぱい母の頭を殴ったの。母は何も言わず、目に一杯涙を溜めていたわ」

愛子は言葉に詰まり、涙を浮かべた。原はちょっと済まなそうに視線を下に落としたが、黙っていた。一呼吸おいて愛子は途切れ途切れに続けた。

「・・・わたし悲しくて、・・・怖くて、どこかに逃げ出したい、なんとかここから逃れたいと強く思ったの。必死になって、そのまま逃れたいという意識を保っていたら、周りにあるものがポーっとしてきて、意識が遠ざかって行ったの。その後のことは覚えていません。気が付いたら、母と今の父がふたりで優しくわたしを呼んでいるのが分かったんです。それが不思議なんです。どうしてでしょう。優しい心で呼んでいるのが分かるんですね。感じると言ったほうがいいのかも知れません。わたし嬉しくて、嬉しくて、よく前の父が連れて行ってくれた紀ノ川の畔を思い浮かべたのです。あの頃は前の父は母に対してそんなに酷く当たるようなことはなかったの。意識がはっきりするとわたしは紀ノ川の堤に戻っていたの。急いで家に帰ったわ。でも、どうやらわたしが失踪してからの父の荒みようはただ事じゃなかったみたいなのです。何かとっては母を・・・・・・・・」

そこまで言うと愛子は言葉に詰まってしまった。目からは大粒の涙が流れ落ち、愛子は声を殺して咽び泣いた。祐子と亜希子は慰める言葉も見出せずにただ愛子をじっと見つめていた。原は愛子を苦しめてしまったことを悔んだが、今は愛子を元気付けるしかないと思い、話題を変えようとして話し始めた。

「辛いことを聞いてしまっておめんなさい。僕には父も母もおりませんから、愛子さんの気持ちを十分理解できたかどうか分かりませんが、やはり意識の力によって別空間に移動したとしか考えられませんね。今度は僕が失踪した時のことを少し説明します。……僕は誰か第三者の意思によって強制的にこの空間から引き抜かれたようなんです。信じてもらえるかどうか分からないけど、僕は違う世界に行っていました。それは死後の世界でもなく、仏教やキリスト教の天国のような世界とも異なった、夢のような世界です。一見地球上の世界と同じような世界に見えますが、今迄多くの人たちが長い期間を掛けて取り組んでも実現できなかった理想郷とでも言える世界なんです。それは地球上の常識では全く考えられない世界でした。僕はその世界の中で、さまざまな体験をしました。でも、いつも意識だけははっきりと働かせていましたから、自分が鹿児島湾のほとりで失踪した時から帰還するまでのことをずっと認識していました。その世界に居る間、時々誰かに呼ばれていることに気付いていました。でもその呼ばれる時間が短かく断片的だったのと、僕自身がその世界に捕らわれていた為、その呼んでいる意識に同調できなかったんです。ところが、帰還の少し前に、内観さんが僕をずっと呼び続けてくれたのです。そのことに気付いて、内観さんとふたりだけの空間で会うことができました。そして、内観さんの導きで内観さんが呼んでいる空間に移動でき、この世界に戻って来ることができたのです」それを聞いて亜希子が言った。

「わたくしも鹿児島で一度失踪して、祐子お姉さまとお母様に呼び戻していただきました。その時、わたくしは愛子さん、あなたと同じように、自分がどんな状態にあるのかわかりませんでした。その時の記憶もありません。どうして失踪という現象が起こるのでしょうか？そしてそこからの帰還ということがどうして可能なのでしょうか。原さんはどうお考えですか？ 教えていただけますか？賢さんはよく、わたくしたちはほかの人と違った部分を持った人間だとおっしゃいます」

「賢さんが失踪をどのように捉えているか詳しいところまでは分かりませんが、大枠ではぼくと同じ認識だと思います。大前提として、この世

界が自分の作っている世界だということをまず理解してください。この世界を作っている自分の意識は、同時に他の人達の意識でもあります。もっとも意識を働かせずに生きている人がほとんどですから、そういう人たちはただ与えられた世界に生かされているだけですが、生きることを常に意識している人にとってこの世界は、自分の意志でいか様にでも変えることの出来る世界なのです。とは言っても自分の意識が全体の意識の中で正しく作用できるような状態になっている場合に限りませんが。僕たちはそういう世界に生きているし、また、そういう能力も与えられているんです。ちょっと1本のムービーを想像してみてください。その中に自分も登場すると仮定しましょう。自分の姿が描かれたシーンがあるとします。そのムービーを作ったのは全体意識、いわば宇宙の創造神のような存在だとします。そのムービーを見ているのは自分自身です。それがとりもなおさず本当のあなたなのであり、また、同時にあなた以外の方の本体でもあるのです。ムービーの中に描かれている世界がこの現在の世界と考えてください。今仮に第100章に自分の姿が描かれているとすると、その自分の姿の描かれている第100章を切り取ると、その第100章は全体から切り離されたものになってしまいます。その結果、そのムービーの中からは突然あなたの姿が消え、失踪という事態が起きるのです。そして、その切り取られたページを、まったく別のムービーのある章に挿入したとします。すると挿入された章のあるムービーは・・・・・・・・・・ちょっとややこしいですね」

愛子がまだ下を向き、祐子と亜希子が考え込むように首を少し傾けて聞いているので原は話を中断した。亜希子が応えた。

「喩話が上手なので、わたくしは何となくですが理解できます。祐子お姉さまはどうですか？」

「原さんが話していることは分るわ。だけど、その本当の意味はよく分らない。ムービーをこの世界と仮定している所がまだよく理解できないわ」

「そう、僕たちは、時々この宇宙の中で自分の生きている姿があまりにも取るに足らないものに見えるでしょう。だから、そのムービーの切り

取った章を何度読み返してみても、その章にどんな意味があるのかよく解らないでしょう。だけど、この章のシーンは1本のムービーの中のあの章という役割を担っていて、この章がなければ、ムービーが成り立たないんです。この世界はあまりに複雑なので、一本のムービーや演劇に例えるのは難しいかもしれないけどね。僕はこの世界が、本当の世界の写本のようなものだと考えているんです。内観さんもそう考えているようだけど」

その時愛子が言った。

「わたし、この世界は夢の世界じゃないかと思っているの」

原はやっと愛子が顔を上げたので、声を弾ませて応えた。

「そう、そう、そういう表現もいいかもしれないな。夢の中だ。よく夢で登場した人たちが実に生き生きとしていることがあるでしょう。その夢の世界と現実の世界を逆にしてみればいいんです。そうすればこの世界が夢の中の世界に見えてくる。まあ、現実とはそんなもんだと思えばいいかもしれないですね。ただ、夢の世界は普通の人にとっては自分の意志ではどうすることもできない世界でしょう。ところが、自分の思う通りに描き出したのが、この世界なんです。もっともほとんどの人はこの世界が自分の意思の通りに現れるということに気付いていないんですけどね。感覚というのは感情と思考が一体化してはじめて存在すると思うんです。そして更に一体化した意識によって世界は形作られてゆく。自分の意思で世界を作り上げる為には、少なくとも、自分がこうしようとする思考とそれに向かう激しい衝動ともいえる感情が重なり一体化する必要があると思うんです。そして、それを完全に意識している必要があると思うんです。すべての人に平等にそれができるような条件が与えられているんです。だけど、誰もそのことに気付かないから、それを実現できないでいるんです」

「原さん、賢さんも全く同じことを言っていたわ。でも、今ひとつ分からないのは、もし、人類が進化して、すべての人が自分の意思どおりに世界を創造ができるようになったら、この世界はめちゃくちゃになっちゃうんじゃないかしら？」

「わたしたち凡人にはそのところが理解できないのね」

そのとき亜希子が言った。

「でも、なぜ自分が望まないことが起こったり、まったく予期していないことで幸福になるというような偶然ともいえる出来事が起きてくるのかしら。わたくしには、人生ってそのようなことの連続に思えてなりませんわ」

「それはそんなに難しい問題じゃないと思います。自分に起きて欲しくないようなことが起きてくるのは、顕在意識、潜在意識のいずれかに、常に自分がそのような状態に遭遇したくない、遭遇したら何とか逃れたいという意識があるからだと思うんです。その意識のずっと続いている流れに感情のエネルギーが同化するとそのような嫌悪すべき状況を顕現させて、そこから逃げようとする自分を実体化するのだと思います。分かりますか？素晴らしい出来事が降って沸いたように起きてくるのも、同じことなんです。いつも何か素晴らしいことが起きるような気がしていたり、それを受け入れる心の準備をしていると、そのような状況が必然的に起きてくる。特にそれが実現した時のことを具体的にビジョン化しているとその通りの状況が生まれ易くなるんです。だから幸運は降って沸いてくるんじゃなくて、自分でお膳立てして招き寄せているんですよ」

3人は文字通り話に夢中になった。祐子と亜希子は原の話が賢の話とほとんど変わらないと感じ、その安心感から自分たちの生き方や考え方を原に説明し、賛同を得ようと試みた。原はそれについて、肯定も否定もしなかった。ただ、自分の希望を実現させる為には「祈り」が必要だと言った。祐子はその「祈り」という言葉の意味を捉え切れなかった。その言葉の響きがどうしても「神頼み」的なニュアンスを感じさせるので、拒絶したいような感覚を覚えた。祐子は深く深呼吸して、愛子の方を伺った。そして、いつの間にか愛子がいなくなっているのに気付いた。

「ねえ、愛子さん、どこに行ったのかしら？」

亜希子も愛子の姿が見えないことに初めて気付いた。

「彼女なら、さっき、そっとドアを開けて出て行ったよ」

祐子がちょっと不機嫌そうに言った。

「どうして言ってくれなかったの？どこかに行ってしまったらどうしよう」

「いや、大丈夫ですよ。彼女には自覚がある」

「どうしてそんなことが言えるの？彼女、お母さんを亡くして絶望のどん底にいるのよ。わたしたち、彼女に対して配慮が足りな過ぎたのよ。すぐに探しに行かなくちゃ」

「大丈夫ですよ」

そのときドアが開いて、賢が入って来た。

「みんな待たせたな。手続きは簡単だったけど、ちょっとスーパーに寄って来たもんで遅くなっちゃって。明日愛子連れて、湾岸中学に行かなくちゃな」

「あなた、愛子さんが、いなくな・・・」

愛子が賢の後から部屋に入って来たのを見て、祐子と亜希子はほっとして、軽く溜息を吐いた。

「愛子がエントランスで俺を待っていてくれたんだ」

賢は愛子に視線を向けて会釈してから、祐子と亜希子の方に振り向いて、手に持っている紙袋を差し出した。

「酒とつまみを買って来たんだ。今日は皆で麻子さんの追悼をしようと思って・・・愛子、お前はジュースだけだな」

愛子は黙って頷いた。

「それから、今夜からのことだけど、俺と愛子は今日はビジネスホテルに泊まろうかと思うんだ」

「僕がホテルに泊まりますよ」

原の言葉が終わるか終わらないうちに祐子が言った。

「この間のように簡易ベッドを借りればいいのよ。わたしが手配してあげるわ。その方が効率的でしょう。久し振りに帰って来て、いろいろ整理しなければならぬこともあるでしょう」

「祐子、そうしてくれるか？できれば今夜は皆と一緒に居たいしね」

祐子は手際よくレンタル業者に電話をし、すぐに寝具2式を手配した。賢は改めて祐子の機転に感心した。それから全員で夕食の用意をした。

亜希子がピザとサラダを用意し、祐子があさりの酒蒸しを作った。食事はディナーテーブルの上に用意された。椅子がひとつ足りなかったので、賢が寝室から、スツールを持ち出して来た。賢は先ほど買って来た白ワインとグラスを食卓に用意した。向かい合って無言でソファーに座っていた愛子と原は誰が見ても「どうして動かずにいられるのか」と思うほど、身動きせずにじっと中空を見つめていた。食事の支度が整って祐子の合図で全員が食卓に着くと、賢はスツールから立ち上がり、食器棚から皿を1枚持って来た。食卓に乗っているピザの一切れを取るとその皿に載せ、更に自分のサラダから半分ほどをピザの脇に添えた。祐子、亜希子、原の3人は賢のしている行動をじっと見ていたが、愛子は席を立ち、黙って骨壺の前に行った。賢は愛子の後を追うように骨壺の前に行き、ピザを盛った皿をそこに備え、両手を合わせた。愛子も同時に両手を合わせた。ふたりが席に戻ると、祐子と亜希子が同時に

「ごめんなさい、気が付かなくて」

と言った。そこで全員、5分間の黙禱をすることにした。黙禱の終了の合図は原が行うと言った。黙禱を終えると、賢が原に向かって言った。

「どうして瞑目していて、5分間の経過が分かるんですか？」

「時間は自分が作り出していますから、今のリズムの取り方を瞑想中にバックグラウンドで動かして、5分のカウントでレスポンスが返るようにしただけですよ」

「原さん、そんなことができるのですか？」

祐子が聞いた。

「誰でもできると思いますよ。朝何時何分に起きようと思って床に就くと大体その時間に目が覚めるでしょう。それと同じことをするんですよ。自分の意識を完全にコントロールできれば、容易いことです。ただ、時間は自分が作っているという認識がしっかりできていることが前提ですがね」

「原さんって凄いですね。きっとわたくしたちと頭の構造が違うのね？」
亜希子も感心して言った。皆の話聞いていた賢がさらりと言った。

「食事にしよう」

賢は先ず愛子のグラスにオレンジジュースを注いでから、白ワインのボトルを開け4人のグラスに注いだ。そして全員が「いただきます」と声を合わせた後で、すっと立ち上がると、自分のグラスを持って骨壺の前に行き、それを備えながら小声で言った。

「麻子、ワインだ。まだ、この世界の感覚を認識できる可能性があるからトライしてみろよ。ちょっといいワインだぞ」

自分の席に戻ると、何事もなかったようにピザに手を伸ばした。亜希子が立ち上がって食器棚からグラスを一つ持って来て、黙って賢の前に置きワインを注いだ。賢はそれを手に取ると、「ありがとう」と言って一口飲んだ。

「麻子さんはお酒が好きだったんだ・・・と言うか、お酒に馴染んでしまっていたと言ったほうがいいのかもしいけどね。ワインはあまり飲まなかったようだが、今日は口あたりのいいワインだからきっと喜ぶだろう。まだ、意識はここにあるかもしれないよ。愛子が居るからね」ピザを齧ってから、ジュースを一口飲むと愛子が言った。

「お母さんは、事故で亡くなりましたが、亡くなるときはまるで喜びの中に浸っているかのようでした。父を愛していました。わたしとしては苦しいのですが、前の父との荒んだ生活から立ち直れたのも、みんな父のおかげです。母はよく、自分はいつでも死ぬと言っていました。ただ、わたしのことが心配だから頑張らなくちゃいけないと。亡くなる直前まで父のことを想い続けていました。わたしに「お母さんは、賢さんに会う為に生まれてきたのよ」って何度も言っていました」

ここまで話すと、愛子は目に涙を一杯溜めて、下を向いてしまった。賢がポケットからハンカチを取り出して、愛子の目頭を拭ってあげた。それを見て祐子が言った。

「お母さん、賢さんのことをそんなに深く愛していたの？」

「すべてを捨ててもいいほど父を愛しているので、もう自分の命は惜しくないと言っていました。あんなふうに喜びに満ちた母を見ていると、わたしまで嬉しくなっちゃって。初めて父に会って、その深い愛を知ってから、母は父と再び会える日だけを夢見て生きていたようです。亡く

なる前に父が来てくださって、母は咽び泣きました」

原が言った。

「愛を持って、死を成就したのだから、お母さんはこの世界に生きたという証を残したよ。お母さんは完全にこの人生を生き切ったんだ」

祐子は嫉妬に似た複雑な気分だった。しかしそれ以上に麻子の愛の深さに感動を覚えた。そして、愛子に向かって言った。

「生きたれば 恋することの 苦しきを 猶命をば 逢ふにかへてん・・・拾遺和歌集にある歌よ。そのままね。わたしにもできるかしら」
亜希子が言った。

「お姉さま、わたくしも今、同じことを思いましたの。麻子さんのように激しく愛に燃えながら命を全うしたいですわ」

賢はただ黙って聞いていた。賢にとって祐子も亜希子も、そして既にこの世に居ない麻子も別々の個性を持った存在ではなかった。いずれの女性に対しても自分の全てを賭けて愛し続けていた。そのとき賢の携帯電話が鳴った。食事の席を立つと賢はリビングルームのソファの陰から携帯電話を取り出し、窓の外に視線を投げながら応答した。

「もしもし内観です」

「由美よ。あなた、やっとチャンネルを開いてくださったのね。わたしがどれほど寂しかったか分かるかしら。あなたに会いたい。お友達と一緒に食事をなさっていたでしょう。わたしは今部屋に居るの。あなたの写真を見つめていたら、あなたの意識に繋がったのよ」

「元気か？」

「ええ、あなたが元気なら、わたしも元気よ。これから会えないかしら？」

「俺は今日、和歌山から戻ったばかりで仲間と一緒になんだ」

「分かっているわ。それじゃ残念だけど、明日ね。必ず連絡してね」

「分かった」

電話を切ってスツールの席に戻ると、祐子が言った。

「どなたから？」

「早瀬由美さんから。明日、会うことにした」

「あなた、今いらして頂いたらどうかしら。わたし一度由美さんに会っ

てみたいわ」

賢が明日ふたりきりで由美に会うことに反発を覚えて祐子がそう言う
と、亜希子もすぐに言った。

「わたくしも一度お会いしたいわ。いろいろお伺いしたいことがあります」

原智明が言った。

「早瀬由美さんは、5000年前からのすべての過去世の記憶を持っていると聞きました。僕も、一度お会いして、話をしてみたいと思います」

「わかりました。皆、由美さんに会ってみたいんだね。愛子、お客さんが来るけど、大丈夫か？」

愛子は黙って頷いた。賢は携帯電話をテーブルの上に置くと、席に戻らずに、そのまま寝室に入って行った。全員が賢の行動にしっくりしないものを感じた。それは賢が携帯電話を置いて寝室に入った為でもあった。しかし、だれもそのことを口にすることなく、急に無口になり、それぞれにピザをとったり、水を口にしたりした。愛子は賢の入って行った寝室の方に体を向けて、寝室のドアを見つめた。5分ほどして、ドアが開いて賢がにこにこしながら出て来た。

「今日早瀬由美さんをみんなに紹介するよ。一度顔を合わせておいた方がいいかもしれない。みんな由美さんに会いたいようだからな。後でちょっと迎えに行ってくるよ」

祐子が言った。

「あなた、この場所を伝えて、来ていただいた方が早いんじゃない？」

「もう伝えたよ。すぐ家を出るって言っていた。だけど、初めてのところだから、由美さんも不安だろう。後でちょっと、駅まで迎えに行ってくるよ」

「えっ、どうやって由美さんに連絡したの？」

祐子が不思議そうに聞いた？

「ああ、彼女が帰還できた時、彼女とはテレパシーで話ができるようになったんだ。ちょっと君たちとも試してみたいな。少しトライしてみようか？」

原智明が笑顔を見せて言った。

「それはすごいな。まず、僕とやってみませんか？僕は失踪していた時、向こうの世界でそこに生きている人たちがテレバシーで話しているのを見たんですが、自分にはできませんでした」

「そうおっしゃってましたね。じゃ、順番にやってみましょう。いいですか、全員僕の方角に意識を向けて、思考を止めて受動状態になってください。聞こうと意識しないで、自然に聞こえてくる声を捉えてください。あるいは声ではなくて、イメージかもしれませんが……今から話し掛けますから僕が何て言ったか答えてみてください」

賢は原、祐子、亜希子、愛子に向けて、「僕の母の名前はエリザベスです」と一人一人に順番に同じメッセージを送ってみた。一人に対して3回ずつ送った。

「だれか、僕のメッセージをキャッチできたかな？」

誰も返事をしなかった。少しして、愛子がぽつりと小さい声で言った。

「ぼくの母の名前はエリザ？」

「近いな、愛子、あとは誰も分からなかった？」

みんな首を振った。

「僕の母の名前はエリザベスです」って言ったんだ。みんなにそれぞれ3度ずつ送ったんだけどね。よし、今度はみんなから順番に僕にメッセージを送ってみてくれないか？瞑想状態に入って、心の中で僕に話し掛けてみて。できるだけ僕の知らないような話をして。まず、原さんからどうぞ」

原が目を瞑った。賢は意識を受動状態にした。原の声が聞こえてきた。原は「明日、不動産屋に行ってアパートを探します」と言っていた。賢は声を出して答えた。

「そんなに急がなくても暫くの間、ここに住んだらどうですか？」

祐子と亜希子が驚いたような顔をした。祐子が言った。

「すごい。原さんの話わかったの？」

「うん。原さん、「あした、不動産屋に行ってアパートを探す」って言ったでしょう」

「ええ、その通りです！」

原は明らかに興奮している。次に祐子からの声を聞き取ろうとしたが、駄目だった。亜希子と愛子からの声はキャッチできた。賢が一番聞き取りたかった祐子のを聞き取れなかったのもう一度試してみた、しかし、どうしても祐子の声だけは聞き取れなかった。祐子は臉に涙を浮かべた。賢は祐子を励まそうとして言った。

「祐子、個人的な特性だから、気にするなよ。後でゆっくり練習しよう」祐子は黙って頷いたが、悔しさにやっと堪えているようだった。賢が言った。

「それじゃ、ちょっと行ってくるよ。愛子一緒に来るか？」

愛子は賢の目をじっと見つめたまま、視線を逸らさずに頷いて直ぐに立ち上がると、賢の側に寄った。祐子と亜希子は賢が自分の知らない世界にも生きていることに多少の焦燥感を覚えた。ふたりが丁度地下鉄駅の出口に差し掛かった時、由美が出口の階段を上がって来た。由美は賢の姿を目にすると、階段を上がる歩調を速めた。

「あら、来てくださったのですか？」

「うん、由美は初めてだろう。それに暗くなったからな」

「大丈夫なのに・・・そちらは？」

「愛子だ。今日から俺の娘になった。愛子、浄蓮の滝で失踪した由美さんだ」

由美は賢の言った言葉の意味を解せなかった。

「愛子です。よろしくお願い致します」

「早瀬由美です。はじめまして。あなたが麻子さんの娘さんね。テレビで一度拝見したわ」

「はい、わたしあちらの世界から帰還したばかりです」

3人は賢を真ん中にして歩いた。愛子が賢の右手に自分の左手を絡めて歩いた。由美は、賢から少し離れて歩いた。

「やっと、チャンネルを戻してくださったのでほっとしました。あなたにチューニングしてもいいですか？」

「うん。勝手をして済まなかった。必死だったんだ。意識の流れを中断

したくなかったんだ。ごめん」

「分かっているわ。でも、できるだけチャンネルは切らないでね。辛いから」

「うん、もうしないよ」

3人が部屋に着くと、祐子と亜希子が入り口で出迎えた。

「ただいま！・・・こちらが由美さんだ」

「はじめまして、早瀬由美です」

「まあ、入り口ではなんですから、奥に入ってください。挨拶はそれからにしましょう」

賢が言った。由美は賢に促されて部屋に入るとソファの横に立った。

「じゃ、改めて紹介するよ。こちらが浄蓮の滝で失踪して、ついこの間帰還できた早瀬由美さんだ。彼女は過去世をすべて記憶している特殊な能力の持ち主だ。由美さん、僕の仲間を順に紹介するよ。愛子はさっき挨拶したからいいね。こちらが祐子・・・・・・・・・・」

賢は全員を簡単に紹介していった。由美はその都度、頭を下げて「よろしくおねがいします」と言った。祐子と亜希子は由美と顔を付き合わせながらもできるだけ平静を保つ努力をした。由美の存在は祐子と亜希子にとっては、最も大きな不安材料だった。しかし、ふたりとも微笑んで、由美と賢の様子を交互に伺っていた。一通り紹介が終わると、ふたりの女性の心の動きなど気にもとめず原が口火を切った。

「お会いしたばかりなのにいきなりこんな質問をして失礼ですが、僕は基本的に、失踪状態にあるときは、この世界での時間という概念がなくなった状態になると考えています。実際自分が失踪した時もそういう状態だったと思います。でも、早瀬さんのことを聞いて、それが真実なのかどうかを確かめることができるんじゃないかと。つまり、失踪状態は死んだときの状態と同じなんじゃないかということですが、どう思われますか？」

賢が間に入った。

「うん、それはポイントを突いた質問だな。もし、それがはっきりすれば、誰も死を恐れなくなる。そうなると、ほとんどの人が無用な執着を

捨てて、この世界がユートピアになるかもしれないな。尤も、そうするとこの世界の進歩も無くなるか。うーん、難しいところだな……由美さんの記憶には人類全体の望みを叶えることができる可能性が秘められているな。時間についての真実と、人間は生き通しの生命だという事実がはっきりしたら、世界が変わるかもしれない。うーむ……」賢の言葉に、3人の女性は息を飲んだ。原は黙って頷いた。由美は賢の方を向いて話し始めた。

「わたし、過去世の記憶だけではなくて、この前失踪していたときのことも、死んだ後のこともすべて覚えているのです。でも、学校のテストの時の暗記のような、頭をひねって思い出すような記憶じゃないのです。何となく、おでこのところに閃きみたいに浮かんでくるのです。わたしはおよそ5000年前に内観さんの魂から分離した存在なのです。その悲しい分離が起きてしまった後、この世界に生まれたときのこと、それから50回ほど生まれましたが全て覚えています。もちろん、日常的な細かいことまでは思い出せませんが、鮮烈な印象を受けた出来事はすべて記憶に残っています。ある1回の誕生から、その人生、そして、死、死後の生、そして次の誕生までの過程をすべて憶えています。わたしの意識は常に内観さんを追って生まれ変わりを繰り返しました。この生でやっと、内観さんと同じ世代の女性としてお会いすることができたのです。わたしは生まれ変わる度に、ずっと意識を研ぎ澄ませて内観さんを探し続けたのです。ですから、今まで出会った人たちのことははっきり憶えています。人間は生き通しなのです。死ぬことはありません。この世でいう死とは、肉体と思考機関だけの死であって、意識は、何も変わっていません。でも、この肉体は、とても大切なものだと思います。なぜなら、この肉体を通してしか、わたしたちは自分自身を知ることができないからです。この世界には自分を反射させる鏡を置けるのです。写された自分の姿をその元にある自分の本体に反射できるのです。その反射で、本体の特性を変えていくことができるのです。死後の世界や失踪中に居た世界ではその可能性はほとんどゼロでした。わたしはこの世界で自分が行ったことによって自分の本体が実際に変化したのを経験し

ています。それは、次の生で個性として現れてきます。でも、死後の状態にあるときは、自分自身を変えることはほとんどできませんでした。だから、この世界の生活がいかに大切かということが分かります。失踪していたときの世界は意識の持ち方でどうにでもなる世界でした。それは死後に一時的に住む世界ととても似ています。その状態は死後、その一時的な生活を経て、自分の本体に帰還して行く途中段階のような状態です。最終的に自分の本体に帰還すると、後は自分で突き動かされるように生まれ変わりを意思するようになるまで、そこに留まります。そうそう、時間の経過ですね。時間は自分が作っているのでしょうか。それはどの世界、どの状態でも同じだと思います。この世界も同じだと思います。ただ、この世界では規則的にリズムを作り出す仕組みが時計という形で一般概念化されていますから、意識がそれに引きずられてしまうでしょう。だから、時間があるように錯覚を起こしてしまうのですね。ねえ賢さん、そうでしょう？」

全員、しんとして由美の話に聞き入っていた。賢が応えた。

「まさに、由美さんの言う通りかも知れない。由美さんの言うところの由美さんの本体はまだ、由美さんの個性を持っている。その個としての自分が自己としての意識、いわば自我を離れたとき、大いなるものと一体化するんじゃないかな」

原が両手を組みながら由美に向かって言った。

「僕も早瀬さんと同じことを考えていましたが、ただ考えるだけではどうにもならないでしょう。体験しないことには確信が持てないですからね。これまでいろいろな人たちが、人間の理想的な生き方についてさまざまなことを体験し、それを多くの人たちに伝えてきましたけど、ほとんどの人はその賢者たちの言ったことを信じ、それを崇め、暗証し、唱和することで、自分自身を失ってきたように思います。仏教のお経や、キリスト教のミサはみなこの類で、それを唱えたからと言って悟りの境地になったり、心が浄化されたりすることはほとんど無いと思います。僕たちはそれを体験し、その体験に基づいて生きることができたとき、初めて生きたと言えるのだと思います。早瀬さんはそれを地で行ってい

る方だと思います。それができたのも、早瀬さんが自分の魂の片割れである内観さんを真剣に求めて生き通してきたからだと思います。求める人への想いがこれほど純粹で、強い方はいらっしやらないでしょう」それを聞いて、それまで黙っていた亜希子が言った。

「わたくしはこの人生を賢さんに委ねました。早瀬さんには敵わないかもしれませんが、でもわたしのすべてを賢さんに捧げて生きてゆきます。早瀬さんが5000年待ったとおっしゃるのでしたら、わたくしはこれから10000年でも100000年でも賢さんの傍を離れません。いつもわたしの中に賢さんが居ますから」

祐子はそれを聞いて、亜希子を睨み付けるように観た。

「亜希子さん、どうしてそんなに挑戦的になるの？まだ、早瀬さんが5000年待ったということ、賢さんと一体だった魂の片割れだってことが本当のことかどうか分からないじゃないの。わたしは早瀬さんの言葉より、麻子さんの方がずっと純粹に賢さんを愛していたような印象を受けるわ。早瀬さんは自分の失ったものを求め続けたんじゃないかしら。そうでしょう。早瀬さんと会うまで、そのことは賢さんの意識には無かったんでしょ。そうだとすると、一つの魂だったっていうのは可笑しいと思うわ」

由美の口元から微笑が消えた。愛子は祐子の言葉を聴いて、書棚の骨壺に視線を投げ掛けた。由美が言った。

「わたしたちは切っても切れない間柄なのです。誰が何と言おうとも5000年の間、わたしが賢さんを探し続けてきたことは確かです。そして、やっと巡り逢えたのです。わたしは他の誰が内観さんのことを愛していようと、恋い慕っていようと、そんなことは構わないのです。もう、わたしはこの方から永久に離れません」

賢が黙っているの、少し間をおいて原が言った。

「皆さん、内観さんのことを愛していらっしやるのですね。知っていますか？内観さんは特定の人とだけ生きるつもりはありませんよ。誰とも結婚はなさらないと思いますが」

愛子が下を向いて小さい声で言った。

「でも、・・・母とは結婚しました。そして、わたしは父の子供になりました。だから、わたしはずっと父と一緒に生きてゆきます。本当にいつも一緒に居てくれるって、父がわたしに誓ってくれました」

祐子がすこし苛付いて言った。

「愛子さん、お母さんは苦しんでおられたでしょう。だから、賢さんが優しくしてあげたのよ。賢さんの慈しみの心よ。賢さんはそういう方なの。わたしが一番よく知っているわ。こんなことを言うと失礼かもしれないけど、早瀬さんはそれを誤解されたのじゃないかしら、賢さんは誰にでも優しいから」

由美は鋭い目つきで祐子を睨みつけるようにして言った。

「いいえ、賢さんとわたしはまた元のようにひとつになったのよ。もう、誰も壊すことのできないしっかりとした絆で結び付いたの。あなたが何とおっしゃろうとその事実は消えないわ。もうわたしたちはひとつの魂なのよ。好きとか、愛しているとかということを超えているのよ」

祐子は収まらなかった。今まで、抑えてきた感情の嵐が一気に噴出してきたのを意識した。

「忘れじの 行く末までは かたければ けふを限りの 命ともがな・・・あなた、わたし、死んでしまいたいわ」

賢が漸く口を開いた。

「僕が優柔不断な為、皆に苦しみを与えてしまって、本当に済まなく思うよ。でも、自分でも不思議なんだが、祐子のことも亜希子のことも由美のことも麻子のことも皆、真剣に愛しているんだ。そのことで、君たちの心に傷を与えてしまったのなら、本当に済まなく思うよ。今でもふたりきりでいるときの気持ちに何の変化も無いんだ」

3人の女性は黙ってしまった。愛子が小さい声で言った。

「賢パパ、わたしのことは？」

「馬鹿だな。お前は僕の娘じゃないか。だれよりも一番愛しているよ」賢は横に座っている愛子の肩を抱き寄せた。愛子は顔を赤くして下を向いた。その時呼び鈴が鳴り、レンタル店が寝具を2式持って来た。賢が出て、ソファの後ろに寝具を置くように頼んでから、3日分のレンタ

ル料を支払った。レンタル店の20歳前後の店員は活気のある声で「毎度ありがとうございます」と言って立ち去った。待ち兼ねたように原が言った。

「僕には恋という感情の経験がありませんから間違っているかもしれませんが、皆さん、内観さんに恋されているんじゃないですか？皆さん、内観さんをととても激しく求めているように感じます。問題は、これからの人生でこのままの情熱を保って生きてゆけるかどうかですね。大抵の人は、長い間一緒に居ると相手への情熱を失ってしまいます。それまでは相手の一挙一動がすべて気になり、相手のことを常に意識の中に置いて慈しんでいても、一旦安定的な状態、えーと結婚生活とか同棲とかを始めると、相手が苦しんでいるのさえ見えなくなってしまうでしょう。だから、それを警戒して、内観さんは結婚をされないんでしょう。ねえ、内観さん」

「ええ、原さん、その通りです。でも、その結果、皆を苦しめているのでしたら、できるだけ、皆から離れていようと思います」

亜希子が言った。

「だめです。離れるなんて言わないでください。わたしの生き甲斐はあなた以外には無いんですから。もしそんなことをなされたら、わたしも麻子さんのように死んでしまいます」

祐子が言った。

「あなた、わたしたちが悪かったわ。ねえ、亜希子さん、それに早瀬さん。わたしたちはやはり、彼を独り占めにしようとしていたのよ。本当はちょっと辛いけど、賢さんが居なくなってしまうたら、わたしには生きる意味が無いわ。亜希子さんと同じよ……忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもある哉……あなたのことが一番大切よ」

「祐子のことを忘れるわけじゃないか。そんなことを言わせてしまって、済まなかった。もう、皆から離れようなんて口にしないよ。でも、皆を愛する気持ちはどうすることもできない。そのことでみんなを苦しめたんなら。本当にごめん」

祐子が手の甲で涙を拭いながら言った。

「早瀬さん、許してね。わたし、あなたに敵意を持っていたの。嫉妬よ。だって、あなた、5000年も前から賢さんのことを知っていたって言うんですもの。ごめんなさい」

賢が言った。

「僕は由美さんのことはそんなに遠い昔から知っていたとは思っていない。とは言っても、由美さんとは、意識がとても同調しやすいことは確かだ。だから、さっきも言ったように、テレパシーで話をすることもできるし、相手の目を通して透視もできるんだ。でも、だからと言って由美さんにだけ特別の感情を抱いているわけではない。皆同じように愛している」

祐子はその言葉が気に入らなかった。以前、賢が祐子のことを誰よりも一番愛していると言った言葉が脳裏を掠めた。しかし、今は賢が亜希子と由美に配慮してみな同じように愛していると言っているのだと思った。祐子は湧き上がる感情を飲み込んだ。それから漸く日常的な話題に移った。亜希子が茶を入れて来た。

由美がアパートを出たのは8時過ぎだった。賢は愛子とふたりで由美を駅まで送った。地下鉄の切符売り場までゆくと、賢が言った。

「今日ごめんな。こうなることは予想していたけど、一度は皆に会わなくてはならないだろう。気分を悪くしないでくれよ」

改札に入る前に由美は賢の胸に頭を付けた。賢は由美を軽く抱いた。由美がホームに消えると、愛子が賢の右手を握った。由美から「あなた、会えてうれしかったわ」というメッセージが送られて来た。

「愛子ごめんね。疲れているだろう。もう、みんなに引き取ってもらおう。明日は新しい学校に転入届を出して、挨拶もしなくちゃな」

「賢パパ、わたしは大丈夫よ。今夜もずっと傍に居てね」

アパートまで愛子は賢に体を凭れ掛けて歩いた。アパートに着くと既に祐子と亜希子は帰り支度をしていた。ふたりは名残惜しそうに帰途に就いた。暫くして、3人はシャワーを浴びてから床に就くことにした。先ず、賢が愛子を連れてシャワールームにゆき、シャワーの使い方を説明

した。愛子はシャワールームが今まで見たこともないような作りになっているのに驚いた。そこにトイレが付いているのを見て賢に言った。

「トイレとシャワーが一緒だと、誰かがお風呂に入っているときに他の人がトイレに行きたくなったらどうするのかしら」

「そうなんだ。僕もこういう作りは好きじゃないな。落ち着かないしね。まあ、これからずっとここで過すんだから、慣れなくちゃな」

「うん」

愛子は一旦旅行鞆の処に行って下着を取り出すと、シャワールームに入って行った。賢は愛子の無頓着さが少し気になっていたが、麻子と3人で過ごした時とは違い、愛子は服を脱ぐとき、シャワールームの入り口の陰の、居間から死角になるところで脱いだ。賢はそれを見て、「やはり、気を使っているんだ」と思ってほっとした。暫くして愛子がシャワールームから出て来た。

「原さん、賢パパ、お先に頂きました」

賢は次に原にシャワーを浴びるように勧めた。原も素直に従った。原がシャワールームから出て来ると、賢は愛子に寝室で休むように勧めた。しかし、愛子はどうしても母の近くで就寝（やす）みたいと言った。賢と原は納得した。愛子と賢が居間で休むことになった。3人で居間のソファを動かし、骨壺のある書棚の前と、その横に2つの床を延べた。それが済むと原は「お先に」と言って寝室に入り、扉を閉めた。賢が最後にシャワーを浴びた。シャワーを浴びながら、今日一日の省察を行った。長い一日だった。愛子の気持ちが意識に流れ込んでくるような気がした。賢は思わず涙を流した。シャワーの湯で涙をかき消そうとしたが、却って麻子の面影と重なり、涙は流れ続けた。賢がシャワールームから出て来ると、愛子が骨壺の前で両手を合わせていた。賢も横に並び、手を合わせて麻子の安寧を祈った。瞑目を解くと、愛子が賢をじっと見つめていた。賢が

「さあ、寝ようか？」

と言うと、愛子は黙って頷いた。賢は愛子の頭を胸に引き寄せて抱きしめた。愛子はしっかりと賢にしがみ付いて、囁くように言った。

「賢パパ、抱っこして寝てね。わたし、とっても寂しくて、怖いの」
賢は愛子を抱きしめたまま、小さい声で答えた。

「心配いらないよ。今晚はこうして愛子を守っていてあげる」
ふたりは骨壺の前に敷いた方の床に潜り込んだ。賢が愛子の方に体を向けると、愛子が賢の胸に顔を埋めてきた。賢は愛子の背に軽く手を回した。愛子は賢の胸で啜り泣いた。暫く泣いていたがやがて泣き止むとそのまま眠りに落ちた。賢は「この子を必ず守り抜く」と自分に誓った。翌朝、賢が目を覚ますと、愛子がキッチンで朝食の支度をしていた。骨壺の前には、新しい水が供えられていた。

「おはよう、愛子もう起きたのか。よく眠れたか？」

「おはよう、賢パパ。わたし、まだ起きたばかり。ぐっすり寝たわ。お母さんの夢も見なかった。賢パパは目玉焼き好き？原さんはどうかしら」

「好きだよ。原さんも僕も、大抵のものは食べるよ」

「分かったわ。ねえ、ここのコンロの使い方教えて？」

賢は愛子にIHヒーターの使い方を教えてから、朝の身繕いをし、麻子の骨壺の前で黙禱をした。愛子は初め恐る恐るタッチパネルスイッチを押していたが、すぐにその操作方法を飲み込めたらしく、楽しそうに鼻歌を歌いながら、鍋を取り出して味噌汁を作り始めた。賢は愛子の鼻歌の曲は聞いたことが無かったが、リズムカルな歌だった。その時寝室のドアが開いて、原が欠伸をしながら出て来た。

「おはようございます。愛子さん早いんですね」

「おはようございます。いつもこのくらいに起きています。もうじきお食事の支度ができますから、ご一緒にいただきましょう」

「原さん、おはようございます」

「おはようございます」

「今朝は愛子が食事を作ってくれて、なんか家庭的な雰囲気ですね」

「僕はさながら居候ってところですね。でも、朝食を作って貰えるなんて、施設のとき以来だな。愛子さんに感謝しなくちゃね」

「美味しいかどうか分からないのに、そんなこと言わないでください。
わたし、緊張しちゃう」

愛子はそう言いながら、まず麻子の骨壺の前にご飯とみそ汁を備えた。暫く瞑目していると、顔を洗って戻って来た原が、愛子の横に来て両手を合わせた。ソファーに座ってそれを見つめていた賢はふたりが兄妹のように見えてきた。原は愛子より15センチほど背が高かったが、背後から見るとふたりの背丈はバランスが整っていると感じた。昨夜は愛子が自分のメッセージを受け取れたが、原にはできなかった。賢は試しにテレパシーで。ふたりに対して同時に同じメッセージを送ってみた。

「今年中にアメリカに行くことになると思うけど、一緒に行ってくれないか？」

ふたりが同時に振り返って、賢の方を見た。賢は微笑みながら、頷いた。ふたりは黙って顔を見合わせた。原が言った。

「何をしに行くのですか？」

それに続いて、愛子も言った。

「わたしも連れて行ってくれるの？」

賢が笑いながら言った。

「はっはっは、ふたりとも、僕のテレパシーを受け取れたじゃないか。ちょっと試してみたんだよ」

愛子が少し膨れたような顔をして、

「なんだ、冗談なんだ」

と言った。原は微笑んでいるだけだった。

「いやいや、多分今年の夏頃にはアメリカに行くことになるような気がするんだ。仕事も少し絡むけどね。その時に、アリゾナの両親のところに寄って来ようと思うんだ。愛子には僕の両親に会って欲しいし、原さんには、多分仕事のことで、一緒に行って欲しいとお願いすることになると思うんだ」

原がちょっと不思議そうに作り笑いをして言った。

「未来のことがそんな風に予想できるんですか？ぼくは、よく将来に起きる事象の発生する確率を計算して、予想することがありますけど、精々1週間前位の事しか予想できません」

「僕は、心を空にしているとき。これから自分のとる行動の道筋みたい

なものを感じることもあるんだ。でも、自分でその道筋を変えようとすると、その道筋が見えなくなるんだ。心が充足していて、それでいて自分を意識していない時によく、将来が見えることがあるんだ」

「賢パパ、わたしが夏休みの時に連れて行ってね。そうすると学校を休まなくてもいいでしょう」

「そうだね。そうなるといいね」

「わあ、楽しみだな」

愛子は急いで台所に戻ると、ほとんど整っている食事の最後の準備に戻った。その時チャイムが鳴った。賢がインターホンに出ると、祐子と亜希子だった。少ししてふたりは部屋の扉を開けた。途端に味噌汁のほのかな香りがふたりを包んだ。まず祐子が言った。

「皆さん、おはようございます。あら、お食事の支度をしているの？」
亜希子も続いて言った。

「おはようございます。皆さん、愛子さん、よくお休みになられました？」
3人は一斉に返事をした。

「おはようございます」

「おはよう」

賢がそのあとをフォローした。

「愛子が食事の支度をしてくれたんだ。君たちもこんなに早く来てくれて、ありがとう」

「おかげさまで、わたし、よく休むことができました。賢パパと原さんが優しいので、わたし、幸せです」

祐子が言った。

「これからお食事なの？」

「うん、これからだ」

「わたくしたち、お食事の支度をさせていただこう思って参りました」

「君たち、まだ、食事してないだろう。愛子、ふたり分を追加できるか？」

「はい、賢パパ。すぐ用意するわ」

「愛子さん、いいのよ。わたしたち、自分で支度するから」

「いいえ、わたしにさせてください。皆さんに親切にされて、わたし、

このくらいのことしかできないんです。美味しくないかもしれませんが、わたしに……」

「そう、それじゃ頼んじゃっていいかしら、ねえ、亜希子さん」

「ええ、お姉さま。愛子さん、よろしくお願いします」

4人はソファーに腰掛けて待つことにした。祐子と亜希子は立ち上がると、骨壺の前に行き両手を合わせた。ソファーに戻ってから祐子が言った。

「麻子さんに会って見たかったわ」

「わたしもです。お姉さま」

賢は黙って微笑んだ。原が言った。

「内観さん、麻子さんが亡くなられた後、お会いになったんでしょう。麻子さんはどんな感じでしたか？」

「うん。どう言ったらいいだろう、透明な感じというか……いや、それとも違う。姿はあるんだけど、その姿を見ていると、麻子の意識の動きが見えるといった感じだった。とても純粹で、美しかった。逆に自分たちが、あまりに汚れている所為か、近付き難い感じを覚えた。麻子には愛しかなかったように思う」

その時、愛子が朝食の準備ができたと声を掛けた。全員食卓に移動した。賢が昨夜から置いてあるスツールの席に腰掛けながら愛子を見た。愛子は自分の感じた麻子の印象を言った。

「わたしが会ったお母さんはいつものままのお母さんでした。わたしのことをとても心配してくれて……」

愛子の目に涙が浮かんだのを見て、賢はしまったと思った。祐子がそれを覚って言った。

「さあ、愛子さんが用意してくださった朝食が冷めちゃうわ。いただきましょう」

皆、頷いた。愛子も祐子の言葉にほっとして、にっこり笑った。はじめに味噌汁を口にした亜希子が言った。

「おいしい！愛子さん、お味噌汁お上手ね。お母さまに教えていただいたのかしら」

「ありがとうございます。母が教えてくれました」

シンプルな朝食だったが、全員がその味に驚いた。特に変わった材料を使った訳ではなかったが、香りにも味にも深みを感じられた。全員が愛子を褒めた為、愛子は照れて顔を赤くした。朝食が済むと祐子と亜希子は後片付けを手伝った。少しして賢が愛子に学校に出掛けようと言った。愛子は少し緊張気味だったが、明るく返事をするとうすぐに支度を始めた。祐子と亜希子も一緒に出掛けることにした。ふたりは買い物をすると言った。原も同時に出掛けた。アパートを探すつもりだった。今はまだ賢のアパートという藪に隠れて追跡の手を逃れているが、それはいつも報道陣の意識の対象になっていて、間違いなくリスクだった。賢が自分の同居をいつまで隠し続けられるか疑問だった。一日も早く、自分だけのアパートに引っ越したかった。5人は一緒にアパートを出たが、原だけは地下鉄に乗らずに、近くの不動産屋を廻ってみると言って地下鉄駅の入り口で4人と分かれた。賢と愛子が江東区立湾岸中学に着いたのは9時過ぎだった。地下鉄を3つ目の駅で降りた。祐子と亜希子はそのまま都心に向かうことにした。正午に渋谷で待ち合わせて、昼食を一緒にすることにした。愛子は緊張していた。地下鉄の混雑は想像を絶するものだった。愛子は地下鉄の駅のホームに大勢の人が居ることにびっくりしたが、愛子たちが乗客の隙間に自らを押し込むようにして乗った後から、ホームにいたほとんどの人が雪崩込んで来たので、一層驚いた。賢は愛子が揉みくしゃにされないように自分の胸の中に抱き抱えるようにして保護した。祐子と亜希子は雑踏には慣れている。賢からあまり離れないように賢の横に身を寄せてうまく体の前に隙間を作った。亜希子は窓際の隙間に体を滑り込ませていた。賢と祐子の間には一人の女性が挟まっている。愛子は手で自分を防御する術を知らなかったので、体全体が賢の体に密着した。賢は愛子を庇おうと、愛子の背に右手を回し、小バッグを持った左手を愛子の腰に回していたので、愛子は手をだらりと降ろした状態で賢に抱き締められているような感覚がして、上目遣いにちらっと賢の顔を見上げた。優しそうな賢の瞳と出会って、顔が紅潮してきた。

「愛子、凄いだろう。東京の地下鉄や電車は、毎朝こんな状態だよ」

「う、うん。びっくり」

一つ目の駅では大勢の人が降りて、車内の混雑が少し和らいだ。愛子は恥ずかしそうに賢から体を離れた。しかし、それも束の間またどっと人が入って来た。愛子は、今度は自分と賢との間に隙間を作ろうと試みたが、それも無駄だった。祐子はずっと奥まで押されて行ってしまった。愛子は先ほどよりもっと自分が賢の体の中に食い込んで行っているような感覚を覚えた。

「今日は、また、凄く混むな。大丈夫か」

「う、うん」

愛子の顔は真っ赤になっている。しかし、それは愛子にとって、胸弾む体験だった。2つ目の駅では人の出入りがあまり無かった。電車の急発進で乗客全体が倒れ掛かった時、賢は倒れないように足を踏ん張り、必死に愛子を抱き締めた。愛子も賢の体にかじり付いた。賢は愛子の手が自分の背中にまわされていたことを知った。電車の揺り戻しで正常な位置に戻ったとき、ふたりは顔を見合わせ微笑んだ。愛子は恥ずかしそうに賢から目を逸らせた。賢は4、5人隔てた奥から賢の方をじっと見ている祐子の視線に合った。祐子はいつも自分を守ってくれていた賢が今は、少し自分から遠ざかって愛子を庇っていることが寂しかった。その視線は、悲しそうだった。亜希子は祐子と向き合うような位置にいた。電車が3番目の駅に入った時、賢は愛子の背中にまわしていた右手を引き抜いて祐子に手を振った。亜希子も賢の方に振り返った。賢は亜希子にも手を振った。ふたりはまた、怒涛のように電車の外に押し出された。愛子が言った。

「賢パパ、わたし、ダンプカーの砂利になったような気分だわ」

「本当だな。そんな気分だ。今日はいつもより酷いな。だけど、反対側の線は日本でも指折りの地獄ラッシュだよ。こんなもんじゃない。僕は、毎朝、決死の思いで乗るんだ。特に鈍行が酷い。快速がベッドタウンに停まらないから、飛ばされた駅の鈍行の乗車率が200パーセント近くになるんだ」

湾岸中学の校門は鉄の扉で閉ざされていた。賢が呼び鈴を押すと、背の高い、眼鏡を掛けた50歳前後の背広姿の男性が出て来て、扉の鍵を開けてくれた。

「お待ちしておりました。最近この辺りは治安が悪くて、扉も施錠しないと不用心なんです。お手間を取らせて、申し訳ありません」

背の高い男は教頭を名乗った。ふたりは教頭に案内されて、校長室に入った。そこには既に校長と一人の30歳前後の眼鏡を掛けた頑強そうな女教師が、入り口に立ってふたりを待っていた。賢は愛子と自分を簡単に紹介してから、校長に転入の為の必要書類を一式提出した。校長はそれにさっと目を通すと、書類を机の上に置いてから、ふたりを応接用のソファに座るように促した。校長、教頭と女教師がふたりに向かい合って座った。

「お母さんを失くされて、大変でしたね。3学期は月曜日から始まりませんが、出席できますか？」

校長が懇篤な口調で質問した。賢が答えた。

「はい、是非そのようにさせていただきたいと思います。愛子はまだ母親を失った悲しみから完全に立ち直っているとは言えませんが、そこはわたくしが父親として支えてまいりますので、よろしくお願い致します」校長は愛子に向かって、確かめるように質問した。

「愛子さん、今、お父さんの言われたことに間違いありませんか？今度の月曜日から通学できますか？」

愛子は「はい」と元気よく返事をした。

「分かりました。それでは、正式にあなたの編入を認めます。それでは、校長のわたくしから、この学校の方針などを説明します。先ず、この学校は一般に言われる受験校ではありません。生徒たちは自分たちの意思でいろいろな活動を行っています。あなたが今度編入する第2学年の3学期はほとんどの生徒たちがこれからどういう方向に進もうかと考えている時期です。あなたが将来についてどういう考えを持っているかによって、編入するクラスを決めたいと思います。ここは、お父さんではなくて、愛子さん自身が答えてください。どういう方向に進みたいと思

っていますか？」

愛子は賢の方を覗いた。賢が会釈したのを確認すると、話し始めた。

「わたしの考えは、賢パパ、いいえ、父にはまだ話していませんが、将来はバレエをやりたいと思っています。でも、わたしは自己流で練習しただけで、正式に教わったことはありませんから、どうしたらいいか分かりません。前の学校にはバレエ部はありませんでした。今度この学校で、それができたらいいと内心楽しみにしていました」

校長は愛子の身体をさらっと眺めて言った。

「愛子さん、それはよかった。当校には男子、女子ともバレー部があります。あまり背が高くないから、セッターのようなポジションを狙うことになるのかな。いずれにしても、スポーツ選手を目指すのは、躍動的でいいですね」

愛子は首を横に振っていった。

「いいえ校長先生、わたしはあの国際的バレリーナの森川洋子さんに憧れています。あの方のバレエを見ていると、自分が森川さんになったような気持ちになって、とても幸せなのです。わたしもあの人のように美しいバレエを踊ってみたいです」

校長が「はっはっは」と笑った。教頭も、女教師もにっこり微笑んだ。

「わたしは、てっきりバレーボールだと思いました。ごめんなさい。そうですか。残念ながらこの学校には舞踏のほうのバレエ部は無いのですよ。でもそういう希望を持っているということはいいことです。将来の夢の実現に向けて頑張ってください。・・・となると、佐波真知子先生、やはり、あなたのクラスに入って頂くのがいいですね」

校長は女教師の方を見て言った。佐波と呼ばれた女教師は眼鏡を押し上げながら言った。

「はい、わたしが担任としてお預かり致します。わたしのクラスは、いろいろ変わった個性を持った生徒たちを集めたクラスです。高校受験についても、進学校ばかりでなく、将来の希望に沿った高校を選択し易いように配慮しています。そういう点で、自分がやる気になると、さまざまなタイプの生徒と接することで、切磋琢磨されるクラスですが、消極

的で、内向的な生徒には少しきついかもしれません。愛子さん、大丈夫ですか？ お父さん、よろしいでしょうか？」

賢は一旦愛子の方を振り向いて、頷いた。愛子も元気よく、

「はい、よろしくお願い致します」

と言った。佐波が続けて話した。

「愛子さん、お父さん、この近くにわたしの知り合いがレッスンを指導しているバレエ教室があります。初級コースから教えていますから、一度行ってみたらどうですか？」

愛子の顔がパッと明るくなった。佐波はその住所と電話番号、責任者の名前をメモ帳に記入し、そのページを切り取って賢に渡した。そこには次のように書いてあった。

「アメリカンバレエスクール「天使への階段」 江東区門前仲町934の48 スクール長 雲居小百合」

賢が言った。

「ありがとうございます。愛子、帰りに寄ってみようか？」

「うん、賢パパ」

校長と教頭は愛子が賢パパと呼んでいることに少し、違和感を覚えたが、ふたりとも微笑んで2度頷いた。佐波は微笑みもせずに話を続けた。

「ところで、お父さん、愛子さんはとてもよい成績なのに、1学年遅れていますね。差し支えなかったら結構ですが、事情をご説明いただけないでしょうか？」

賢が答えた。

「はい。ご存知のことかもしれませんが、愛子は1年前に失踪してつい最近、昨年XX月XX日ですが、帰還したのです。ですから、1年間のブランクができてしまったのです。和歌山でも1年学年を下げて、再登校を認めていただきました。初めは愛子も辛かったと思いますが、今では自分の状況を受け入れて、元気に通学できるようになりました。愛子は、最も頼りにしていた母親を失ってしまった衝撃があまりにも大きいので、1学年下がったことなど、今はほとんど意識に上がって来ないと思います」

賢は愛子の瞳を見つめた。愛子の瞳が少し潤んだのを感じた。愛子は唇をきつと結んで頷いた。佐波は立ち上がると愛子に握手を求めた。

「これからよろしくね。あなたの入るクラスは2年のクラスのまま、3学年になる時のクラス替えはありません。これからともに楽しく勉強してゆきましょう」

「はい、先生。よろしくお願い致します」

ふたりが中学校を出たのは10時半を回った頃だった。ふたりは佐波真知子に紹介してもらったアメリカンダンススクールに寄って行くことにした。愛子は校門を出ると、スキップして賢の前を小走りに進んだ。佐波の言う通り、ダンススクールまでは5分も掛からないほどの距離で、住宅地の片隅にある7階建てのビルの3階にあった。入り口のドアをノックすると50歳を超えていると思われる小奇麗で小柄な女性が直ぐに顔を出して、ふたりを招き入れた。

「さっき、真知子さんから電話があった方ね。わたしは雲居小百合。さあ、どうぞお入りください」

ふたりは先ず、入り口で簡単に自己紹介してから中に入った。

「あなた、内観愛子さんっておっしゃるのね。いい名前ね。バレエの経験はどの程度おありなの？」

愛子はいきなり、経験を聞かれて少し戸惑ったが、勇気を奮って応えた。

「はい、わたしはテレビで時々森川洋子さんのバレエを見て、それを真似ていた程度です。まだ、正式にレッスンを受けたことはありません」

「それは、いいのよ。じゃ、踊った経験はあるのね」

「はい、小学校の学芸会で踊ったことがあります。でも、それも自己流で」

「いいのよ。自己流も楽しんで踊る分にはぜんぜん問題ないわ。でも、愛子さん、将来はバレリーナになりたいんでしょう。真知子さんがそう言っていたけど。プロのバレリーナになるには、ものすごい練習と、それに何より、無類のバレエ好きでなくてはならないのよ」

「はい、テレビのインタビューで森川さんもそのようなことをおっしゃっていました」

「あの方は、生活がバレエになっているわ。バレエを踊る為に生まれてきたような方よ。生きることが踊ることなのね。あなた、そこまでやるつもりかしら？」

「今は分かりませんが、もしチャンスがあれば、そういう生き方をしたいと思っています」

「そうなの、分かったわ。それじゃ、愛子さん、あなたの自己流のバレエを少し踊ってみてくれるかしら」

賢は愛子がバレエを踊れることを、初めて知った。

「わたし、トゥシューズを持っていません。それに正式なトゥシューズは履いたことがありません。トレーニングシューズの先に綿を入れて練習しました」

「トゥシューズならここに沢山あるわ。合うサイズの靴を使っていいわよ。わたしが履かせてあげる。どんな曲を踊れるの？曲によっても合うシューズとそうでないのとあるのよ」

「はい、白鳥の湖の練習をしました。第2幕の「4羽の白鳥たちの踊り」のはじめのところが躍らせていただきたいのですが・・・でも、全部自己流ですので・・・」

「それはいいのよ。じゃ靴を履きましょう。準備ができれば曲を掛けるわね」

雲居は愛子がトゥシューズを履くのを手伝ってから、CDラックの一番上の段から1枚のCDを取り出し、プレーヤーにセットした。愛子が踊り始めたとき、賢は背筋に電気が走ったような感動を覚えた。そのなめらかな美しい動きは、今までバレエなど意識的に見たこともなかった不案内な賢の意識を捕らえて離さなかった。3分ほど踊り続けてから、突然愛子は躓いて転んでしまった。雲居はすぐに愛子の元に掛け寄って、愛子を抱き起こした。

「大丈夫？怪我は無いかしら？足首は大丈夫？」

「わたし少ししか踊れないんです」

「いいえ、ひとりで練習していた割にはうまく踊れましたね。リズムが取れているわ。本当に自分だけで練習したの？」

雲井が言った。

「はい、紀ノ川の河原で練習しました。でも、なかなか難しくて」

「そうね、それは、基礎を勉強していないからね。基礎からみっちりやりましょう」

「賢パパ、この教室に入ってもいいかな？」

「勿論だ。愛子、僕もついうੱとり見惚れてしまったよ。ただ、勉強もしなくてはならないから、大変だぞ」

「わたし、頑張る」

賢は雲井がふたりだけで話をしたいと言うので、練習所に愛子を残して、となりの更衣室兼事務所に雲居の後に付いて入って行った。事務所とは言っても、端の方にテーブルが一つとスチール製の椅子が5、6脚置いてあるだけの狭い場所だった。雲井は賢に椅子を勧め、自分も賢に向かい合って座った。

「率直に言って、自己流でここまで踊れる子は初めてです。ただ、基礎ができていないので、身体に無理が掛かっています。その癖を直すのに大分掛かるでしょうが、うまく行けば将来は100年に1度の逸物になれる可能性を秘めているように思います。でも、基礎からの焼き直しになりますから、彼女にとってはかなりきついレッスンになります。本来特訓コースは月謝として5万円ほどいただくところですが、将来への投資と考えて、入会費なし、基礎コースの料金月2万円でお引き受けします。如何ですか？ぜひわたくしに教えさせてもらえませんか？」

賢は雲井の提案に驚いた。ただ、愛子にかなりの負担が掛かるのではないかと思い、それを尋ねた。

「それはそうかもしれませんが、愛子さんの才能なら、それほど苦しい練習にはならないと思います」

雲居のその言葉に賢はほっとして、早速契約書にサインをした。練習は月曜日から1日置きに行くことになった。土曜日と日曜・祭日は休みとのことだった。アメリカンバレエスクールを出ると、愛子が賢の右手に抱きついて言った。

「賢パパ、大好き」

「愛子、自分の思う通りのことをやってみなさい。でも体が限界と思っ
たら、決して無理するんじゃないぞ」

「うん、わたし、頑張る」

渋谷のハチ公前には既に祐子と亜希子が来ていた。祐子は賢の姿が見え
ると、大きく手を振った。

「祐子、亜希子、待たせたか？」

「いいえ、わたくしたち、まだ10分ほど前に来たばかりですわ」

亜希子が応えた。4人は近くのファミリーレストランに入った。席に着
くと祐子が聞いた。

「学校はどうだった？」

愛子と賢が同時に応えようとしたが、愛子は賢に譲った。

「うん、うまくいったよ。まだ、学校の校風は分からないけど、一応、
方針は自由闊達に勉強させることを意図しているようだ。どうだ、愛
子？」

「わたしもそう思うわ。わたし、あの学校好きになれそうです」

「それはよかったわね・・・それでいつから登校するの？」

「月曜日からさ。今日は休みなのに校長と教頭、それと担任の先生がわ
れわれを待っていてくれた。有り難かったな・・・それから、愛子は学
校の近くにあるアメリカンバレエスクールに通うことになったんだ。愛
子、結構踊れるんだぞ」

祐子と亜希子が驚いたような顔をした。祐子が言った。

「本当なの？ 凄いわね。どこかで習ったの？」

「いいえ、見よう見まねで、自己流で練習していただけです」

「それでも、素晴らしいですわ」

亜希子も愛子を褒めた。愛子は今朝から褒められっ放しなので、照れて
しまった。愛子が照れ隠しに下を向いた時、祐子が賢にちょっと目配せ
した。賢が祐子の視線の指す方を何気なく見ると、そこには3人のサラ
リーマン風の男たちが座っている。賢は暫く意識をその男たちに固定し
た。3人は明らかに賢たちを観察している風ではあったが、そこに敵意
は感じられなかった。4人はそれぞれランチメニューから定食を注文し

た。食事が運ばれて来るまでの間、亜希子は愛子にバレエの練習をどんな風にしてたのか聞いていた。祐子はその話を聞いているような振りを装っていたが、その間にハンドバッグからメモ用紙とペンを取り出して、一言二言書き込んだ。食事が運ばれて来ると祐子はソースの瓶を取る動作のタイミングで何気なくメモを賢に渡した。その動作には賢意外に誰も気付いた様子はなかった。メモには「あなた、先に出てね。わたしは後から出るわ。オレンジパレスの前でね」と書かれていた。急いで食事を済ますと少しして、賢が言った。

「ちょっと寄っていかなければならないところがあるから、先に出るよ。3人は少しゆっくりしてゆくといいよ」

祐子がすかさず返事を返した。

「えっ、残念ね。でも、分かったわ。後で電話してね」

賢がファミレスを出ると、直に3人の男たちが後を追った。祐子は男たちの容姿をしっかりと頭に焼き付けた。先に立ったのは40歳代半ばで、やや太り気味の体格のよい男性、その次にやや小柄で色黒、鷲鼻の目つきの鋭い男性、最後に立ったのは背丈の大きな、精悍な顔をした体格のいい男性だった。3人とも紺の背広に地味なネクタイを締めている。3人の男性が支払いをして店を出るのを見計らって、祐子が亜希子に言った。

「今の3人の男の人に気付かなかった？」

亜希子が言った。

「わたくしもあの方たちがこちらを伺っていることに気付いていました。でも特に鋭い視線を投げ掛けてきていた訳ではないので……」

「そうね。だけど、お父様が用心するように仰っていたから、賢さんに先に出てもらったのよ。これで、あの人たちが彼を追っていたのが分かったわ。何事も無ければいいけど」

亜希子も愛子も祐子が賢にメモを渡しているのに気付いていた。ふたりはその意味が分かってほっとした。3人はまだ半分ほどしか食べていない食事を、愛子のバレエの話をしながら食べた。愛子は何もかも初めての経験だった。これまで、ファミレスに入ったことは一度もなかった。

和歌山の中学校への通学路に1店ゴールデンプレートというファミレスがあった。愛子はそのを通る度に中はどんな造りになっているのか、どんな料理が出されるのか、どんな人が働いているのかなどと、思いを巡らせていた。でも、一度もそこで食事をしたいとは思わなかった。食事は家と、学校の教室でいただくものだと決めていた。今、こうしてファミレスで食事をしてみると、テーブルも椅子もとても馴染み易く、落ち着くのを感じた。料理の味は自分が作るものとさほど変わらないと思った。

「愛子さん、何を考えているのかしら？」

亜希子が尋ねた。

「はい、わたしが和歌山に居たときに、通学路にあったファミレスのことを思い出していました」

「そのファミレスはどんな感じだったの？」

「わたし、そこに入ったことがなかったので、詳しいことは分かりませんが、外観はこことあまり変わりません。ファミレスがこんな風になっていることに感心しました」

「そうだったの。わたくしはいろいろなレストランでアルバイトをしてきたので、いろいろなタイプのレストランを知っているのよ。ここは標準的な店ね。中にはサラダバーのあるところや、コンビニと繋がっているところもあるのよ」

「サラダバーって何ですか？」

「レストランの一角にいろいろな種類のサラダボールを並べてあって、サラダ付きのお食事を注文すると、何度でも自分で好きな種類のサラダや惣菜、それに果物なんかを選んで、いただけるのよ。バイキングってご存知でしょう。サラダや惣菜のバイキングって感じかしら」

「凄いですね。わたしも一度サラダバーで食べてみたい」

「サラダバーはレストランの通称ではなくて、レストランのサービスのことよ」

「あっ、そうですね。わたし、サラダバーのあるレストランに行ってみたいわ」

愛子が言い直したので、亜希子と祐子はくすくす笑った。

3人が渋谷のオレンジパレス前で賢と会ったのは1時を回った頃だった。賢はそこで15分ほど待っていた。レストランを出ると賢は直に山手線に乗った。賢を追跡していた3人の男たちも賢を見失わないように、必死に後を追った。残念なことに電車は直ぐには入って来なかった。賢は外回りの待ち列の先頭に並んだ。30秒ほどして電車が入って来た時に、3人の男たちも賢の並んでいる列の最後尾に付いた。賢は素早く電車に乗り込むと出来るだけ奥まで入った。3人が電車に乗り込んだ時、賢は一つ次のドアまで移動してドアが閉まる直前に飛び降りた。3人の男たちは慌てて周りを見回し、賢が発車前に降りてしまったことに気付いたが、既にドアは閉まり、発車した後だった。3人の男性は車輻の中に取り残された。賢はすぐにJRの駅を出て、オレンジパレスに向かった。「人間は自分の次の行動を無意識に予測して、行動に移っているんだと思った。電車に乗った時、追跡している相手が当然次の駅までは行くはずだと思い込んでいる。乗った電車からすぐに降りるというパターンは、あの3人には想定外の出来事だったのだ」と思った。賢は追跡を巻いたことが可笑しくて、歩きながら笑った。すれ違う人たちが賢を見て怪訝な顔をしていた。それを観ると、さらに可笑しさが込み上げてきた。誰が追跡していたのかなどということは、大した問題ではなかった。重要なのはオレンジパレスで3人の女性と会うことだった。オレンジパレスに着いたが、3人の姿は無かった。賢はそこでじっと待った。瞑想をするにはもってこいの機会だった。

「あなた、瞑想していたの？大分待った？」

祐子の声で賢は目を開いた。15分経っていた。

「つけられたでしょう。どうやって播いたの？」

「一旦山手線に乗って、発射前に隣の出口からすぐに降りたんだ。3人を乗せたまま電車は走って行ったよ」

「うまくやったわね。でも走る間に電車降りるの、危なかったでしょう」

「少しね。停車時間の使い方だよ。でもあまりにうまくいったんで、可

笑しくて笑い出しちゃった」

「もう、そんな危ない方法は採らないでね」

4人は愛子がバレエの練習で使う練習着とトウシューズを買いに雲居小百合が指定したスポーツ用品店に行った。愛子は胸躍った。夢にまで見たバレリーナへの道を歩み始めることができたことが奇跡のように思えた。これまで、あの両親の下では、バレリーナになる道など到底見付ける術は無かった。しかし、愛子は常に1千万分の1でも1億分の1でも可能性があれば諦めないと心に誓っていて、いつもその可能性の蜘蛛の糸を捜していた。もしその糸が見つかったら、何としてでも手繰り寄せようと思っていた。スポーツ用品店に着くと、愛子は賢の背中に触れるほど身を寄せて店に入って行った。雲居に言われた用品は値が張った。しかし、賢は何の躊躇も無くそれらの用品と白いスポーツバッグを購入し、その大きな包みを愛子に渡した。祐子と亜希子は、賢が人に物を買って与えるときの姿が好きだった。大きな包みを店員から受け取って愛子に渡すとき、愛子の目を見つめ、微笑んで、「はい」と言って渡した。祐子のときも亜希子のときも同じようにして渡した。ふたりは賢の姿を見て、暖かい血が身体中を駆け巡るのを感じた。それから4人は愛子の東京での生活に必要なになりそうなものを買う為に、西洋バスケットという、寝具や衣類から日常雑貨までありとあらゆる物を取り揃えているデパートに向かった。愛子は花模様のパジャマを選んだ。枕は賢がピンクのカバーがしてある低反発素材のものに決めた。そのほか茶碗、箸、湯のみなどを購入した。レジの清算が済むと、賢は祐子と亜希子に愛子を連れて衣類を買いに行くように頼んだ。ふたりは快く引き受けた。夕方アパートで逢うことを約束して3人と別れた賢は、急いで渋谷駅に向かうと内回りの山手線に飛び乗った。賢は先ほどの3人の男の内の一人在、以前祐子と目黒の原研究会に行った時に、門から出て行った2人の男の内の一入だということに気付いたのだ。「理由も確かめずに逃げるべきではなかった」と思った。目黒の研究会支部のある勾島の家のベルを鳴らすと、前回と同様勾島の女房が応答した。

「少々お待ちください。内観さんですね。今主人に代わります」

「内観さん、よくいらしてくださいました。もしかしたら、来て頂けるかもしれないと思っていましたところですよ。玄関は開いていますので、事務所までいらしてください」

賢は勾島が自分を待っていたようなので、もしやと思った。玄関の引き戸を引いても誰も出て来なかった。賢は「失礼します」とだけ言って中に上がり、廊下を通り抜けて研究会の事務所のある部屋に入って行った。部屋に入ると、例の3人の男性が勾島とともにソファに座っていた。賢は、やはりそうかと思った。勾島が言った。

「内観さん、よくいらしてくださいました。実はここにいる3人は研究会の正会員で笹塚君、矢室川君、源内君と云います」

3人の男性は起立して、それぞれ自己紹介をした。いずれもまだ正会員になったばかりの者たちだった。彼らが正会員になって間もないころ、所長が失踪したとのことだった。賢は言った。

「どうして、わたくしを尾行したのですか？」

勾島が間に入って言った。

「実はわたくしが、この方たちに、貴方をここにお連れするようにお願いしたのです。本当はわたくし自身が出向けば早かったのですが、所長が失踪して以来、わたくしの周りには常に警察の陰がちらついているので、多分あなたにご迷惑をお掛けすることになるかもしれないと思ひまして、この方たちにお願ひした次第です」

3人の中の最も小柄な矢室川が勾島の話を引き継いで言った。

「今日は、内観さんを追跡（つけ）たりして大変失礼しました。僕たちは正会員になって間もないころ、内観さんが最近起きている失踪事件の解明に大きく関わっていることを知りました。それで、一度お会いして是非お話を伺いたいと思っていたのですが、そんな折、支部長の勾島さんに呼ばれて、内観さんが一人にいるときに声を掛けてこちらにお連れするように頼まれました。僕たちは胸躍る思いで出掛けました。勾島さんから聞いていた2階建てのアパートの近くで、内観さんが出て来られるのを待っていたのですが、大勢の方々とご一緒でしたので、まずいと思い、ずっと後を追跡させていただきました。内観さんが女の子を一人

連れて中学校に行った後、渋谷でさらにふたりの女性と会われてファミレスに入られたので、「今日は無理かもしれない」と、少し絶望的になっていましたが、急にお一人でファミレスから出て行かれたので、必死に後を追いました。でも、内観さんの足の速いのなんのって、驚いてしまいました。渋谷で何とか同じ電車に乗ったのですが、そのまま見失ってしまいました。渋谷のホームで話し掛けるべきだったと3人で悔やんでいました」

「僕はレストランであなた方がわれわれを観察しているのを知り、わざと一人になったんです。渋谷では、一旦山手線にりましたが、あなた方を播く為に発車直前に飛び降りたんです」

「大変申し訳ありませんでした。あんな形で追跡するつもりはなかったんですが、結果としてそうになってしまいました」

「もう、そのことは過ぎたことです。それより、わたくしに何か急な用でもおありでしょうか？」

賢は勾島の方を向いて言った。勾島が神妙な体でゆっくり話し始めた。

「所長のことなんです。どうやら、東京に来ているようなんです。いつも何人かの男たちに、いや正確に言いますと、女性も一人いるようですが、その者たちと一緒に行動しているようなのです」

「どうして、所長が東京にいるということが分かったんですか？」

「どうやら、所長は何人かの人間の監視下に置かれているようなのです。羽田空港の保安会社から連絡があったんです。トイレの落書きについてです。それも何か、金属のようなもので、木の扉に引っ搔いて書き込んであったというのです。わたくしの家の電話番号とM4F1THAIと書き込まれていたようなのです。わたくしは保安会社の問い合わせに、知らぬ存ぜぬを通しましたが、これは所長からのメッセージではないかと思ったのです。M4というのは男4人、F1が女一人でTHAIは5人がタイ人だということじゃないかと考えたんです」

「そうですか。それで、わたくしに何か心当たりがないかということでしょうか？」

「はい。それと、内観さんが一連の失踪事件の解決に関与されていると

知りましたので、所長や原さんの最近の情報をご存じじゃないかと思いまして。一刻も早く助け出さないと、所長の命が危ないような気がするのです」

賢は鹿児島空港で3人の男と一緒にいる所長らしき人を見掛けたことと、その少し前に到着していた飛行機がタイから成田を経由しての便だったことを説明した。勾島はそれであの落書きの意味の裏付けが取れたと言った。それを警察に報告すると言った。勾島は原のことについては、それ以上聞かなかったので、賢も口にしなかった。その話を聞いていた一番背の高い、精悍な顔をした源内が言った。

「先ほど、矢室川もお願いしましたが、失踪者の帰還について、お話しいただける範囲で結構ですから、是非教えていただきたいのですが」

賢は警察やテレビ局に説明した通りの話をした。3人はもっと詳しい話を聞きたいようだったが、また今度会った時に話すと言って支部を後にした。3人の男性がいなければ勾島にもう少し詳細を話せたのにと一瞬思ったが、あるいは説明しなくてよかったのかもしれないと思い直した。賢がアパートに帰ると、既に女性たちは戻って賢の帰りを待っていた。亜希子が入り口を開けてくれた。中に入ると愛子が先ほど買った黒いバレエの練習着に着替えていて、祐子の前でくるくる回ったり、足を上げたりしていた。その動きは、とても愛らしかった。部屋の奥まで入ると賢は声を掛けた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

祐子と愛子が同時に賢の方を振り向いた。練習着は体にフィットしていて、体の線がはっきり分かる。賢は愛子が意外と痩せているのに驚いた。よく見ると首筋から胸にかけては肋骨が浮き出ている。最近のオリンピック体操競技でよく見掛ける若年の選手に似ていた。

「愛子、なかなか似合うよ。体操の選手みたいだな」

「いやね、賢パパ。これはバレエの練習着なのよ」

「いよいよ明後日から新しい学校だな。支度は出来ているか？」

「はい、賢パパ。大丈夫よ」

原智明が戻って来たのは6時過ぎだった。アパートの契約を済ませていた。それは以前賢が借りていた2階建てアパートの1階の部屋だった。契約時に必要な住民票も、何の疑念も持たれずに事務的に処理されたとのことだった。原は暫くの間そこで過ごすつもりだと言った。それは賢にとっても都合がよかった。いつでも原の様子を知ることができたとし、連絡を取り合うことも容易だったからだ。原は明朝引っ越しをするつもりだと言った。引っ越しと言っても手荷物一つである。賢は原の生活に必要な品物を揃えるのを手伝う約束をした。

「原さん、わたしたちもお手伝い致します。ねえ、亜希子さん」

夕食の支度を済ませてテーブル席に着きながら祐子が言った。亜希子も快く引き受けた。愛子はまだ練習着を身に付けたままだった。体を慣らすのだと言った。練習着の上に体育用のトレーニングウェアを身に着けている。食事が済んでも、バレエの練習着は脱がなかった。祐子と亜希子が帰宅すると、この日は先ず原が、続いて賢がシャワーを浴びた。愛子は寝る前に入浴したいと言った。原がシャワーを浴びて戻って来ると、賢が直にシャワールームに行った。原は、荷物の整理をしながらソファに腰掛けてじっと骨壺を見つめている愛子に、静かに語り掛けた。

「愛子さん、バレエが好きなんですね。僕もダンスに興味があるんですよ。もっとも僕が興味を持っているのはスーフィーのワーリング（旋回舞踏）というダンスですけどね」

ボーっと骨壺を眺めていた愛子は、サックに衣類を押し込んでいる原の方にゆっくり視線を移して言った。

「スーフィーって何ですか？」

「イスラム教の神秘主義教団のことだよ。教団と言ってもグループみたいなものだけど、そこで踊られる舞踏が素晴らしいんだ。神に近づく為に旋回舞踏を1時間以上も続けるんだよ。でも、イスラム教の国ではあまり歓迎されていないようだけどね」

「ふーん。イスラム教ってアッラーの神を崇拝する宗教でしょう。ジハードなんかちょっと怖いわ。あの人たち、なぜ自分を殺してまで人を殺そうとするのかしら？それに、礼拝の時間に大勢の人が広場で平伏して

いるのを見ると、なんか違和感を覚えちゃうわ」

「うん、そうだね。だけど、イスラム教のコーランの教えでは自分を犠牲にして人を殺すなんてことは許していないんだよ。あれは敵を憎む心が作り出した自分勝手な救済思想だと思うんだな。実際のところは、指導者達が確固とした自意識も持っていない若者を洗脳し、彼等を遣って、敵の攻撃の為にジハードを強要しているのが実態なんだよ。スーフイーはそんなイスラム教の中でも原理主義と云われて、愛や意識の高揚を詩やダンスという形で表現して、神との一体化を目指しているんだよ。僕は日本にいるダルヴィッシュという修行者の集まりに参加した経験があるんだけど、その時、彼らが踊っていたダンスが、何だか宇宙のリズムのように思えて、とても心に残ったんだよ。それから、スーフイーのワーリングが好きになっちゃって、時々それを真似て自分でも踊ったりしていたんだ」

「原さん、あの一、もしできたら、そのスーフイーのワーリング、踊って見せてくださいますか？」

「うん・・・普段はあまり人前では踊らないんだけど、愛子さんしか居ないから一寸踊ってみるよ。暫く踊ってないからうまく踊れるかどうか・・・」

そう言いながら、原は立ち上がりソファの前の広い空間に立った。直ぐには踊り出さなかった。暫く瞑想をしているように目を瞑っていたが、やがて両手を広げ、右掌を上へ、左掌を下に向けて、くるくると回り始めた。その回転に連れて「ーン」という独特な低音のハミングをしている。原のダンスを見ていた愛子は、原が全く静止しているように見えてきた。まるでロクロのようだ。シャワーを浴びて出て来た賢は居間の中央で原が旋回舞踏を踊っているのを目にして、その場に立ち尽した。バスルームの前から居間に移動すると、原の周りに出来ている静けさを壊すような気がしたのである。回転で体が揺れることはなく、まるで頭の前から一本の回転軸が通っているのではないかと錯覚するほど、その回転は静かで安定していた。原は10分ほど回転していたが、やがて静かに手を下ろし、ゆっくり回転を止めるとその場に崩れるように座

り、愛子の方に向けて平伏し、少しその状態を保ってから、ゆっくりと体を起こして立ち上がった。愛子は思わず拍手をした。賢も拍手をした。「原さん、素晴らしかったです。とっても静かで、見ているとなんか心が静まるような気がしました」

愛子が言うと、居間に入って来ながら賢が言った。

「本当に素晴らしい。僕はスーフィーのダンスを初めて観ました」

「いいえ、こんなのはまだ初心者のダンスです。もっといろいろなダンスがあるんです。僕にはこのワーリングくらいしかできませんけど……本当は我々の生きている動きはすべて一つのダンスなんです」

「原さん、わたしの尊敬している森川洋子さんも同じようなことを言っていました。生活の中での一つ一つの動きがすべてバレエの動きなんだから。今度わたしにもスーフィーのダンスを教えてくださいませんか？」愛子が言った。原は頷いた。それから3人は今後の計画について話し合った。明日は日曜日である。3人は月曜日からそれぞれ全く新しい生活を始めることになる。明日は引っ越しが終わったら原は買い物をし、賢は愛子の通学の為の準備をすることにした。話し合いが終わると、賢は9時のニュースを聞く為にテレビのスイッチを入れた。ニュースキャスターは新たな行政の失敗の話をしていて、今度は最近完成した全国のコミュニケーションビジョンという双方向立体放送の設備に欠陥が見つかったということだった。通商産業省の管轄である立ち会い検収で従来の平面ビジョンとの互換性に問題があることを見逃していたと説明していた。その結果、流用できるはずだった現在の設備の一部がこのままでは使用できず、双方向立体放送の開始は2～3年延期されるようだった。そのニュースが終わると次のニュースは新発見に関するものだった。キャスターの説明に賢と原はその場に釘付けになった。それは宇宙の果ての無限遠点がミクロの極限素粒子のその先に見える無限小点を反映していることが発見されたというニュースだった。それは映像的な発見ではなく、複素関数を用いた空間シミュレーションによる発見だとの説明があった。今後、宇宙望遠鏡の開発、設置に大きな影響を与える可能性があるという解説者が説明していた。まだ、その事実の重大さに気付いて

いないようだった。賢が言った。

「やはり、そうだったんだ」

「はい、人類はやっと次の段階に移る下地が出来てきたようです」
愛子はふたりが何を言っているのか分からなかったが、質問しようとも思わなかった。

「賢パパ、わたし、シャワーを浴びてもいいかな？」

「いいとも。もし、風呂の方がよけりゃ、湯船にお湯を張って入ったらいいよ」

愛子はその言葉を待っていたかのように言った。

「わたし、お風呂に入りたい。賢パパ、お風呂の使い方教えて」

賢は愛子の後を追ってバスルームに入り、給湯から入浴までの操作方法を教えて戻って来た。テレビはスポーツニュースに変わっていて、原はもうテレビを見ていなかった。賢はテレビのスイッチを切った。原は「お先に休みます」と言うと、寝室に入りドアを閉めた。賢は楠木の携帯に電話を掛けた。通信できないとのメッセージが返ってきた。田辺の携帯には直に繋がった。

「もしもし、田辺です」

「内観ですが」

「内観さん、どちらにいらしたのですか？ずっと連絡が取れなくて困っていました。月曜日はどのようにしたらいいのか相談したくて連絡をお待ちしていました」

「申し訳ありませんでした。漸く時間が取れるようになりました。明日の午後、打ち合わせできますか？」

「はい。勿論です」

「それでは、前回打ち合わせしたスナックで午後1時にお会いしましょう。それから、楠木さんと連絡が取れないんですが」

「彼は今、カナダに行っています。明日戻ることになっていますから、わたくしから連絡を取ってみます。・・・ところで、どうされたのですか？」

「赤坂であなた方に会った翌日、急な出来事が起こって、西の方に行っ

ていたんです」

「とおっしゃいますと、あの失踪事件の関係ですか？」

「うん、和歌山とか鹿児島とかね。やっと落ち着いたので戻って来たんです」

「そうですか。それでは、明日1時にお待ちしております」

「ありがとう。よろしく頼みます」

賢が電話を切ると、横に愛子が立っていた。体と頭にタオルを巻き付けている。

「賢パパ、今の電話は誰？」

「今度、新しい会社と一緒に仕事をする人さ。明日打ち合わせるようになった」

「ふうん・・・あのね、お風呂、とっても気持ちがよかった・・・賢パパ、わたしね、暗くなると寂しくて。それに凄く怖くなってきて・・・今日もわたしを抱っこして寝てくれる？」

「いいよ、愛子が一人で寝られるようになるまではな」

「もう15歳にもなって、本当は恥ずかしいの。でも、賢パパに抱かれていると安心なの。赤ちゃんみたいでしょ。賢パパはお母さんと一緒よ」
愛子がバスルームのところに戻り、パジャマに着替えて戻って来ると、ふたりは床を延べてから遺骨の前の床の上で瞑目し、昨日と同じようにその床にふたりで潜り込んだ。愛子はすぐに賢の腕の中に体を潜らせて来て、胸に顔をうずめて囁くように言った。

「賢パパ、ありがとう。わたし寂しくなんか無い。いつまでも一緒にいてね。絶対よ」

賢は愛子の涙が流れて、自分の腕に浸み込んできたのに気付いた。

「約束するよ・・・安心してお休み」

「おやすみなさい」

翌朝賢が目を覚ますと、昨日と同じように愛子が食事の支度をしていた。賢が床から起き上がると、愛子が「おはようございます」と言った。すでに遺骨の前には水が供えられていた。賢は遺骨に向かって両手を合わせ瞑目してから床を上げ、身支度を済ませた。昨日と同じようなタイミ

ングで原が「おはようございます」と言いながら寢室の扉を開けて出て来た。

「さあ、今日から、ひとりの生活だ。内観さん、お世話になりました。今日は引っ越しが済んだら所長を探しに出掛けて来ようと思います」

「原さん、本当は僕も同行させていただきたいのですが、今朝、寝具のレンタル会社が来るので、その対応が済んだら行きます。それと、午後は今度のプロジェクトのメンバーと会うことになっているので、祐子が亜希子と一緒に行ってもらうように頼んでみましょう」

「それは助かります」

愛子は朝食の支度に没頭していたが、やっと準備が出来たと見え、大きな声で言った。

「お食事の用意ができました」

ふたりが食卓の席に着くと、チャイムが鳴った。愛子が応対した。祐子だった。一人だった。亜希子は琴の発表会の準備で来られないとのことだった。

「おはようございます。朝食はまだね。よかったわ。わたしも一緒にいただけるかしら？」

そう言いながら、祐子は手に提げていた布袋から小さな重箱に入ったお新香を取り出して愛子に渡してから、コートを脱いでクローゼットの中に掛けた。祐子は真っ赤なセーターにベージュのパンツを履いている。

「はい、今日はちゃんと準備しました」

愛子がそう言ったので、祐子も骨壺の前で手を合わせてから食卓の席に着いた。皆、祐子が席に着くと途端に部屋中が明るくなったような感覚を覚えた。食卓にはわかめの味噌汁にアジの干物と金山時味噌、野菜サラダが用意されていた。愛子が漬物を皿に盛って来て席に着くと、全員で合掌して食事を始めた。

「美味しい。愛子さん、お味噌汁とっても美味しいわ」

「ありがとうございます」

男たちも「美味しい」と言った。原が味噌汁を置きながら言った。

「やはり、家庭はいいですね。僕は内観さんと違って絶対結婚したいで

すね」

「そうだね。僕も家庭の大切さはよく分かるよ」

祐子が賢の方を見て言った。

「そうよ、あなた、やっと分かったの？わたしはいつでも大丈夫よ。ふふふ」

愛子は祐子の言葉に、頭が熱くなってくるのを感じた。

「祐子！・・・」

諭すような賢の口調に祐子はちょっと俯き加減に言った。

「う、・・・うん。ちょっと言ってみただけよ」

食事が済んで30分ほどして、賢を残して3人は原の新しいアパートに移動することにした。部屋は以前賢が住んでいた2階の部屋と同じ造りだった。賢は男が一人でこの部屋に住むときに最低限必要なものを知っていた。出掛ける前に原にそれを説明した。原達はその話をしながら新しい部屋まで来た。冷蔵庫は数馬から貰うことになっていた。原はこのアパートの部屋が結構気に入っていた。部屋の窓からは景色を期待することはできなかったが、近くに大きな車道も無く、車の駐車場も無い為比較的閑静な住まいであることが、原にとっては一番の幸이었다。祐子は青山の家から雑巾やナイロン製のハタキを袋に詰めて持って来ていた。愛子も雑巾を持ってアパートを出て来た。ふたりは部屋に入るとすぐ窓を開け、雑巾掛けを始めた。一通りの清掃が済むと、原は愛子と一緒に買い物に行こうと誘った。愛子は一瞬躊躇したが、賢の言葉に従うことにした。賢が愛子に自分の必要なものを買って来るように1万円札を1枚渡していた。愛子は原と一緒に近くの24時間営業のホームスーパーに行くことにした。原は賢がここに来る前に説明した「必要最小限の雑貨」を買って来ると言って出掛けた。部屋の中には祐子だけが残った。祐子は雑巾掛けを続けた。20分ほどして賢が入って来た。祐子はエプロンを外し、手を洗ってから、ドアを閉めて靴をぬいで上がって来た賢にいきなり抱き付いた。

「あなた、わたし寂しい。あなたが遠くに行ってしまうて・・・」

賢は、祐子を強く抱きしめ、口づけをした。祐子は激しくそれに応えた。

ふたりは立ったまま激しく抱擁し合った。祐子の膝が折れ、ふたりは冷たい床の上に倒れ込んだ。1月の寒気が部屋に吹き込んでくる。求め合う激しさにふたりはひと時寒さを忘れた。

「あなた、愛しているわ。わたし、あなたが居なくなってから、体がおかしいの、きっと心が乱れている所為よ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ふたりは急いで身繕いを正して、情を交わした気配を感じられないか辺りを見回した。

「今日、鶯谷で田辺さんに会うんだ。一緒に来ないか？プロジェクトの件で話をするんだ」

「だめよ。今、わたしが附いてゆくのは貴方の為にならないわ。この間も言ったように、わたしは、プロジェクトのメンバーにさえ入れてもらえれば自分であなたに近付いて行く」

賢は祐子を強く抱き締めて、口づけをした。・・・・・・・・ふたりは久し振りに情を交わしたことで心に安らぎを覚えた。祐子は再び雑巾掛けを始めた。床を拭きながら鼻歌でテレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」を歌い始めた。賢は祐子が充足しているときの状態を知っていた。今がまさにそれだった。このまま、祐子と結婚してしまいたいという思いが激しく湧き上がって来たが、それを振り払った。1時間ほどして原と愛子が、ふたりとも両手に大きな袋を提げて戻って来た。

田辺は鶯谷のスナックの奥のテーブル席に入口から横顔が判る位置に座っていた。賢がスナックに入っていくと、田辺は立ち上がって頭を下げた。

「やあ、待たせたみたいですね」

「いいえ、わたくしもたった今来たばかりです」

「いよいよ明日から新しいプロジェクトが開始される訳ですね」

「はい。わたくし、どうしたらよいのか見当も付きません」

「先ずは、ステアリングメンバーとの顔合わせからになるんじゃないかな」

「はい。でも空手で迎え撃ってもいいんでしょうか？」

「僕は、かまわないと思いますよ。まだ、何も明らかになってないのですから」

「内観さん、わたくし企画案を2つ作ってみました。持って来ているんですが、ご覧になっていただけますか？」

「それはご苦労様でした。でも、ずいぶん早いですね」

「はい。でも、唯の思い付きですから、あまり推敲できてないんです」
そう言いながら、田辺は横の座席に置いてあったページジュの鞆から厚さ10mmほどの1冊のファイルを取り出し賢に渡した。賢はそれを受け取るとすぐに開いてみた。そこにはプレゼンテーション用ソフトで作成された、カラーのきれいな提案書が綴じ込んであった。ページを繰ってゆくにつれ、その概要がはっきりして来た。

「田辺さん、あなたはどのようにしてこのようなインフラを準備したらいいと考えたんですか？」

「はい、日本の人々の考え方を考える為にはどうしたらいいのか、どういう条件で人々の意識が変わるのかという観点から、案を考えてみました。その一つが、今ご覧になっているものです。それは、マスメディアだと思ったのです。ですから、まず教育用のテレビ、ラジオの放送局を立ち上げるとというのが1番目の案です。専門家を集めて、いろいろな洗脳的な番組を作成して放送するんです。2番目はずっと後ろの方にある、そうです。そのページの案です。日本国中の人にメールと郵便のDMを送り付ける為のインフラを作るという案です」